

エジプト学研究第 20 号 2014 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2013 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 19 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一・和田浩一郎	13
第 6 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	43
〈論文〉		
エジプト先王朝時代の穿孔技術に関する実験考古学的研究 －フリント製小型ドリルの切削能力と形状変化の観察－	長屋憲慶	59
〈研究ノート〉		
クシュの碑文を母系制として読む －即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」－	齋藤久美子	83
エジプト先王朝時代における石製容器の地域性	竹野内恵太	99
オブジェクト・フリーズ (<i>frise d'objets</i>) と出土遺物の比較 －装身具およびアミュレットを中心に－	山崎世理愛	115
〈動向〉		
争乱の中の大エジプト博物館建設と文化財保存修復をめぐる国際協力	高木規矩郎	131
〈活動報告〉		
2013 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		145
2013 年 エジプト調査概要		149
〈編集後記〉	近藤二郎	155

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2013, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Shinichi NISHIMOTO and Koichiro WADA.....	13
Preliminary Report on the Sixth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI.....	43
Articles		
An Experimental Approach to the Drilling Technology in the Predynastic Period: Cutting Capability and Reduction Patterns of Flint Micro-drills	Kazuyoshi NAGAYA.....	59
Reading the Kushite Texts in the Matrilineal Context: Enthronement Records and the Covenant between Alara and Amen-Re	Kumiko SAITO.....	83
Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt	Keita TAKENOUCI.....	99
Comparison between the <i>frise d'objets</i> and Burial Goods: Focused on the Ornaments and Amulets	Seria YAMAZAKI.....	115
Report	Kikuro TAKAGI.....	131
Activities of the Society, 2013-14.....		145
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2013.....		149
Editor's Postscript.....	Jiro KONDO.....	155

エジプト ダハシユール北遺跡発掘調査報告

— 第 19 次発掘調査 —

吉村 作治^{*1}・矢澤 健^{*2}・近藤 二郎^{*3}
西本 真一^{*4}・和田 浩一郎^{*5}

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season

Sakuji YOSHIMURA^{*1}, Ken YAZAWA^{*2}, Jiro KONDO^{*3}
Shinichi NISHIMOTO^{*4} and Koichiro WADA^{*5}

Abstract

The mission of the Institute of Egyptology, Waseda University, conducted the fieldwork at Dahshur North from September 15th to October 13th in 2010. In this season, surface layers of the grids (Fig.1, 60 x 5 m) to the north of the Ramesside tomb of Ta were removed, and thirteen shaft tombs and two surface burials were identified. Among them, three shaft tombs (Shaft 113, 122, 123) and two surface burials (19p-011, 19p-014) were excavated. In addition, three shaft tombs (Shaft 90, 95, 96) were also cleared, the entrances of which have been already identified in the past seasons.

Shaft 90 (Fig.3) had three subterranean chambers, and five complete faience shabtis and two lids of faience canopic jars were found (Fig.4, 5). Associated amphorae (Fig.9.12-14) and shabtis were dated to the Ramesside Period. Shaft 95 (Fig.10) had a small flat based bottle (Fig.11), dated to the Middle Kingdom. Shaft 96 (Fig.12) had almost the same plan as Shaft 90, and shabtis made of pottery and wood were found (Fig.13, 14). Two wooden shabtis were complete. From Shaft 113 (Fig.17) traces of wooden Middle Kingdom coffin were identified. The wall of the burial chamber was daubed with thick layer of *tafla* (Photo 1), onto which the pigment of the coffin was adhered (Photo 2). From the shaft filling of Shaft 122 (Fig.19), at the level of the entrance of Room A, fragments of the Ramesside anthropoid coffin and a limestone relief fragment were found (Fig.20, 21). Shaft 123 (Fig.19) had a burial chamber to the south side at the bottom and at northern wall of the shaft there was a hole connected to the Room A of Shaft 122. At the bottom of the Shaft 123, complete large pottery jar, so called “Beer bottle” (Fig. 23.17), was found *in situ*.

One of the surface burial (Fig.25) cleared in this season, was belong to a child, and around the neck a set of glass bead pendants and gilded bronze ring were retrieved (Fig.26.1, 2, Photo 3). The other surface burial was already disturbed, no object was found except fragments of human bone and reed mat.

1. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所によるダハシユール北遺跡の調査隊は、1995 年の新王国時代第 18 王朝末の「王の書記イバイ」という人物の「トゥーム・チャペル（神殿型平地墓）」の発見を皮切りに、「パシエドウ」、

* 1 早稲田大学名誉教授

* 2 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

* 3 早稲田大学文学学術院教授

* 4 サイバー大学世界遺産学部客員教授

* 5 サイバー大学世界遺産学部講師

* 1 *Professor Emeritus, Waseda University*

* 2 *Visiting Fellow, Institute of Egyptology, Waseda University*

* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

* 4 *Visiting Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*

* 5 *Lecturer, Faculty of World Heritage, Cyber University*

「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に点在する数々の新王国時代の墓を発見してきた。2004年以降は「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に広がるシャフト墓、土壌墓の調査を続けており、中王国時代と新王国時代の未盗掘墓が複数発見されるに至った。その後の調査で、この遺跡は新王国時代だけでなく、中王国時代の墓域も数多く存在することが分かってきた。両時代の埋葬習慣の解明が、本遺跡を対象とする研究の主要なテーマとなっている。

第19次調査¹⁾の発掘は2010年9月15日から10月13日にかけて実施された。ダハシュール北遺跡の墓域のほぼ西端に位置する「タ」のトゥーム・チャペル周辺の様相を明らかにすることを目的として、「タ」墓周辺における発掘調査を継続した(図1)。まず発掘区の北辺を5m北側へ拡張する形で地上の発掘を行い、その後発掘区の南東に位置するシャフト90、95、96、今期拡張した範囲に含まれるシャフト113、122、123、土坑墓19p-011、19p-014の発掘を実施した。これらの墓は中王国時代と新王国時代に年代づけられるものであり、両時代における埋葬習慣や当時のメンフィス地域の様相を知る手がかりを補強することができた。本稿はその成果の概要報告である。

2. 地上部の発掘調査

今次調査では調査区を北側へ5m広げ、地上部の発掘調査を実施した。グリッド2E47cおよびd、2E48cおよびd、2E49cおよびd、2E50cおよびd、3E41cおよびd、3E42cおよびdが該当し、東西60m、南北5mの範囲である。地上部の堆積は厚さ10cm前後の礫を含む砂層であり、その下は地山となっている。2E50d南東部、3E41c南半分、3E41d西側から南縁にかけては薄いタフラ(付近の岩盤に由来する泥質の石灰岩)によって構成される層が砂層の下にあった。拡張された範囲から新たにシャフト112～124、および土壌墓19p-011、19p-014が発見された。

3E41cでは、タフラ層に包含される形で土器が集中して出土した。出土した土器群の詳細は図2に掲載した。ミニチュア土器(図2.1～3, 8～10)、胎土 Nile B1²⁾の半球形碗(図2.6)、Nile Cの大型壺(図2.12, 13)などは中王国時代の埋葬に見られる典型的な構成である。R. シストルと A. ザイラーによる半球形碗の分類では、図2.6は Group 4に相当し、アメンエムハト3世治世頃から第13王朝に年代づけられている(Schiestl and Seiler 2012: 100-105)。大型壺の口縁部の形状は、R. シストルと A. ザイラーによるこの器形の分類では Class 3dに相当すると考えられ(Schiestl and Seiler 2012: 660-661)、Class 3dはアメンエムハト3世治世から第13王朝初期に年代付けられている。さらに、テル・エル＝ダバア出土の同器形の年代に関する研究(Szafrański 1998)の基準に従うならば、この中でも第13王朝初期に年代づけられることになる³⁾。肩に有孔のある平底壺(胎土は Nile C)は、本遺跡で未盗掘の状態が発見されたシャフト65の、シャフト開口部周辺で出土した注口付土器と類似している。シャフト65開口部で発見された土器の一群は、埋葬後の祭祀活動に関連する可能性が指摘されている(Baba and Yoshimura 2011: 165-166, Fig.5.3)。この土器群が発見された場所のすぐ南には中王国時代に年代づけられるシャフト106⁴⁾の開口部が位置していることから、土器群はシャフト106の埋葬に関連している可能性が高い。同様にシャフト開口部周辺で土器が集中して出土する例はこれまでもいくつか報告されており(吉村他 2009: 25, 2010: 25, 写真10)、中王国時代の埋葬時に行われた祭祀活動を示す考古学的資料として注目される。

3. シャフト墓の発掘調査

(1) シャフト90

①遺構の概要(図3)

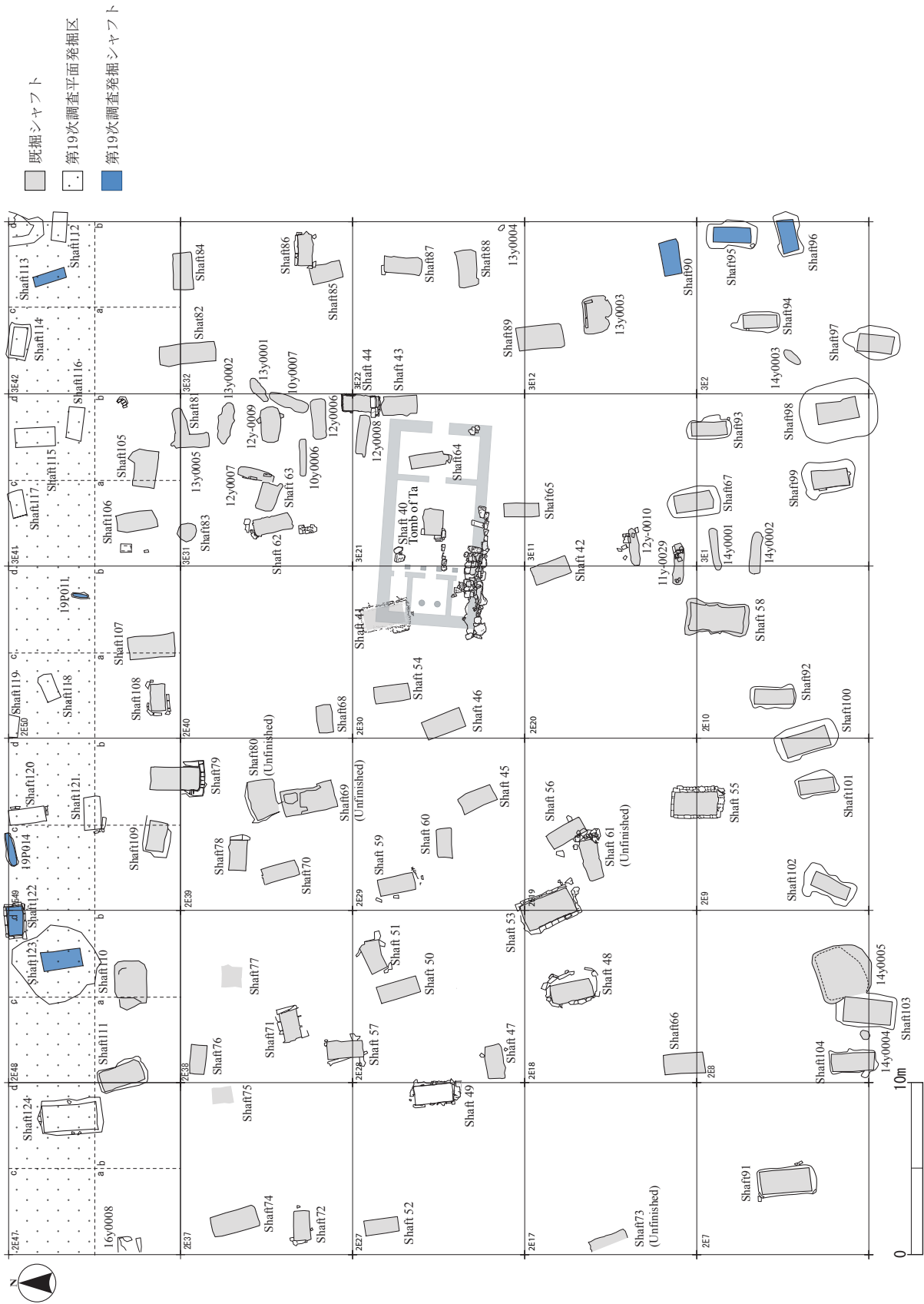


図1 ダハシュール北遺跡調査区
Fig.1 Map of the excavation area around the tomb of T4

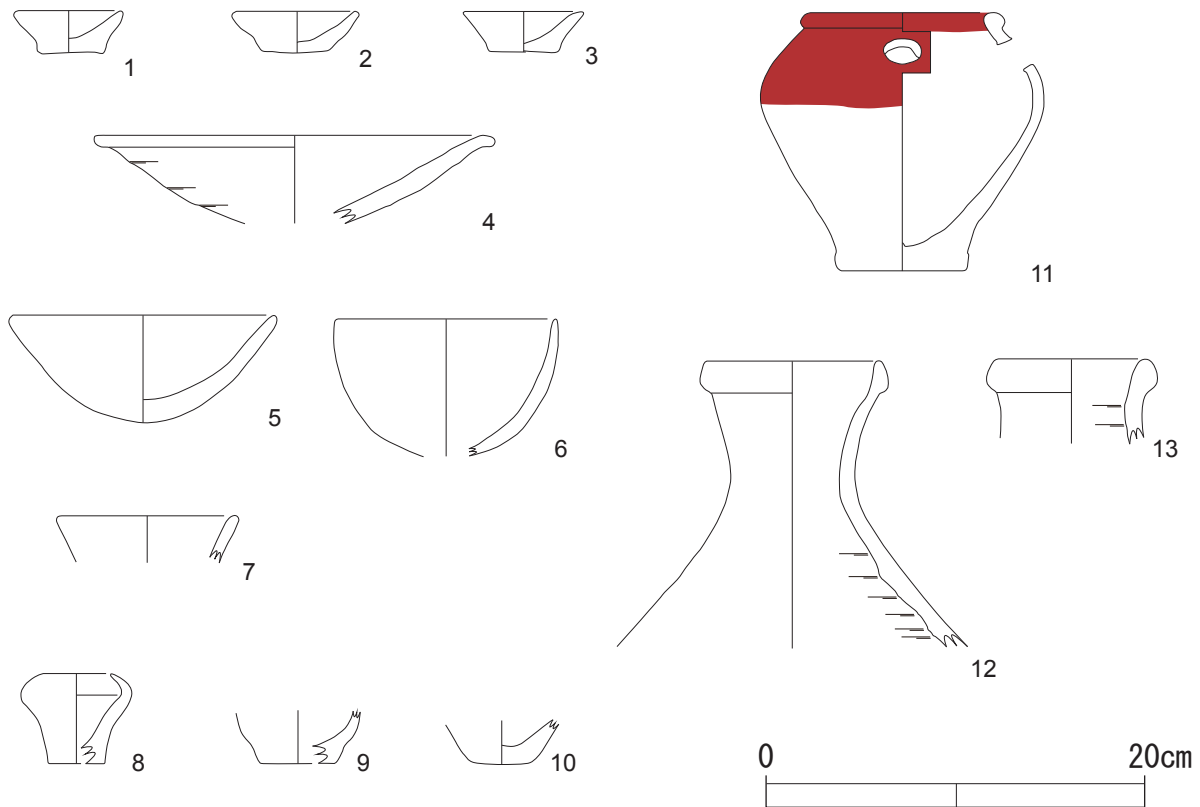


図2 グリッド 3E41c 出土土器
Fig.2 Pottery vessels from Grid square 3E41c

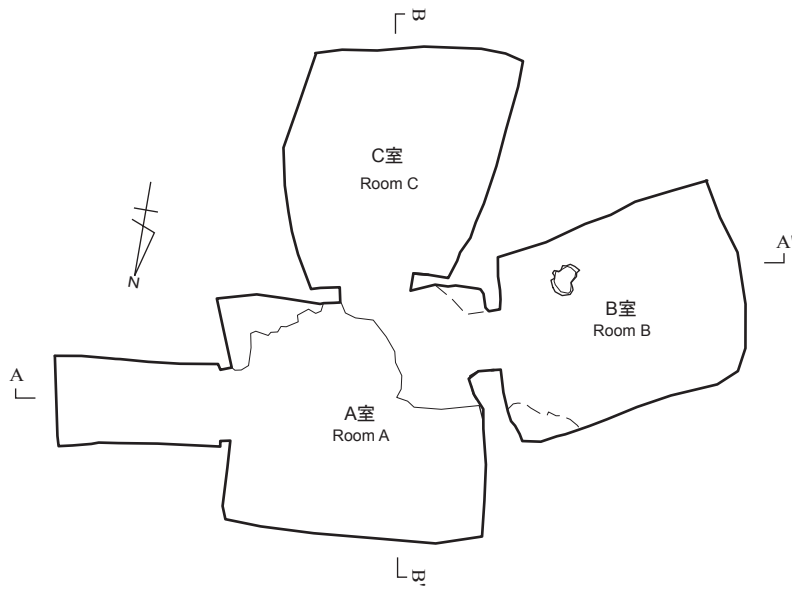
シャフト 90 はグリッド 3E12 に位置し、2007 年第 13 次調査での地上部の発掘でシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸は東西方向であり、平面の大きさは南北 1.0m、東西 2.1m、シャフト部の深さは 9.4m であった。シャフト最下部から西側に部屋が発見された (A 室)。A 室の平面は方形で南北 3.0m、東西 3.5m、床から天井までの高さが 1.6m であった。A 室の西側と南側には別の部屋が作られていた (それぞれ B 室、C 室)。西側の B 室は方形で南北 2.5m、東西 3.0m、床から天井までの高さが 1.1m、南側の C 室は南側に向けてやや幅広になる形状で、南北 3.1m、東西 1.8m、床から天井までの高さが 1.1m であった。

シャフト部は黄色の細砂で満たされており、A 室開口部前のレベルから着衣型のファイアンス製シャブティが出土した。A、B、C 室内部はわずかにタフラ粒の混じる黄色の砂層が堆積しており、ファイアンス製のカノボス壺の蓋 2 点が A 室と B 室の砂層の上から発見された。A 室の北西コーナー付近から人骨と木棺片がまとめて出土しており、人型木棺の眼と眉を表現した象嵌と考えられる遺物群 (図 6 および図 7.1 ~ 3) もほとんどが A 室から出土した。出土状況から、盗掘者に必要なかった物が、A 室の北西コーナーにまとめられていたと推測される。シャブティは全てファイアンス製であり、A 室から 2 点、B 室から 2 点出土した。その他、スカラベやビーズ、指輪、土器片、金箔などが発見された。

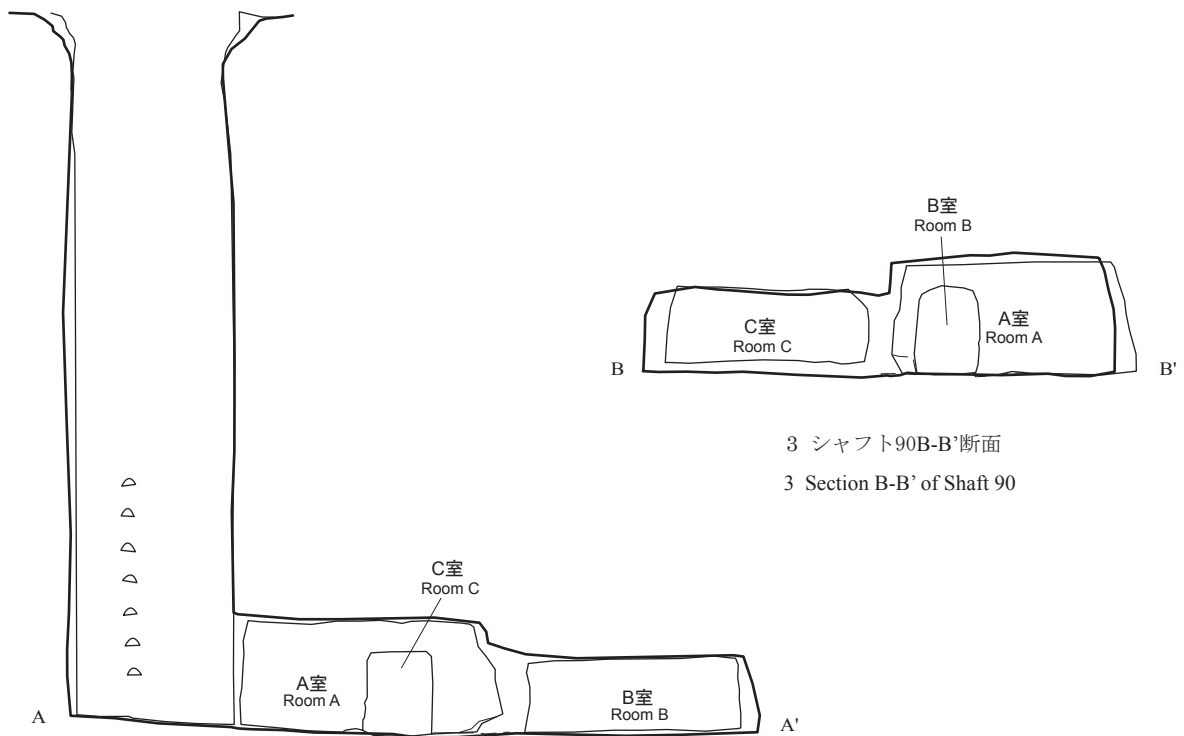
②出土遺物

a) ファイアンス製カノボス壺の蓋 (図 4)

青色ファイアンス製のカノボス壺の蓋が 2 点発見されており、両者とも 2 つの断片から復元された。2 つの断片はどちらの例も A 室出土のものと、B 室出土のものによって構成される。黒色の線で細部が描かれており、図 4.1 はハヤブサの頭部を持つケベフセヌウエフ神を表現したと考えられ、図 4.2 はヒヒの頭部で



1 シャフト90底部平面
1 Plan of Shaft 90



2 シャフト90A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 90

3 シャフト90B-B'断面
3 Section B-B' of Shaft 90



図3 シャフト90平面・断面図
Fig.3 Plan and Section of Shaft 90

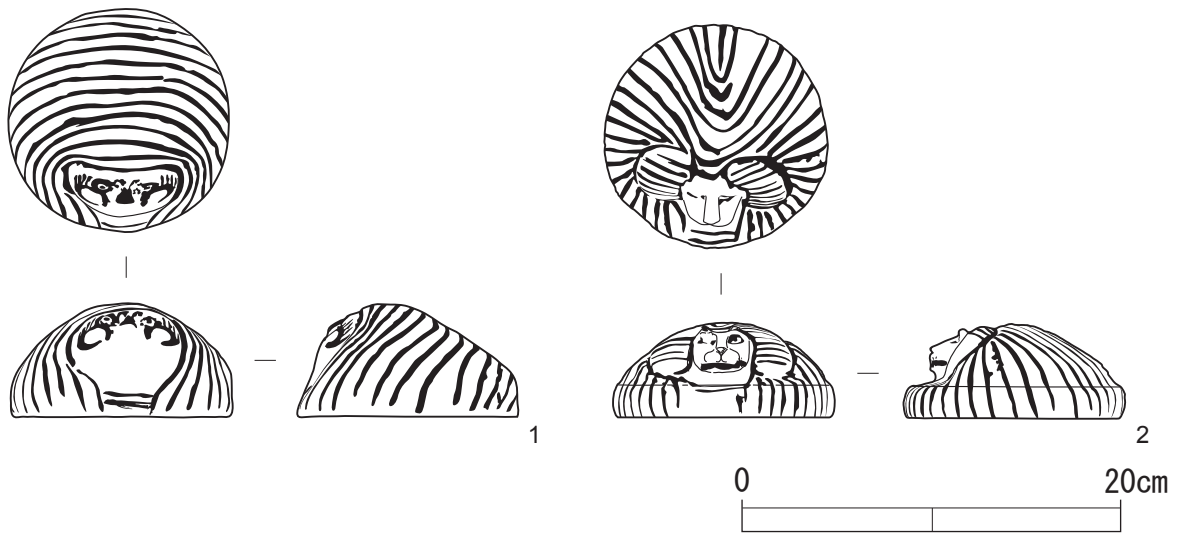


図4 シャフト90出土ファイアンス製カノポス壺蓋
Fig.4 Lids of faience canopic jars from Shaft 90

あり、ハピ神を表していると考えられる。

b) ファイアンス製シャブティ (図5)

シャフト90から全部で5点のファイアンス製シャブティが出土しており、全てやや白みがかった青色を呈し、黒色で細部の表現や銘文が描かれていた。図5.1はシャフト部のA室開口部前から出土した着衣型のもので、銘文は *3sir irwy mꜥ-hrw* 「オシリス イルウイ⁵⁾..... 声正しき者」と書かれていた。

図5.2～4の3点は銘文が2列の帯になって描かれていたもので、背面が平坦で全体が比較的薄いという特徴があった。図5.2、3はA室出土、図5.4はB室出土である。銘文から3点とも同じ被葬者に属するものであり、*3sir kdn ꜥh-pt mꜥ-hrw* 「オシリス チャリオットの馭者 アクペト⁶⁾ 声正しき者」となっていた。このように背面が平坦で2列の銘文帯を持つファイアンス製シャブティはデイル・エル＝バハリで出土した例があり、第21王朝に年代づけられている (Schneider 1977: 4.3.1.64)。

図5.5は銘文帯が1列であるが、正面の外形や大きさ、全体が薄く背面が平坦であるという特徴は図5.2～4と類似していた。被葬者の名前は銘文の磨滅が激しく、判別が難しかった。同様の例は第20王朝に年代づけられている (Schneider 1977: 3.3.1.2, 3.3.1.3)。

c) 木棺の眼、眉の象嵌 (図6、7.1～3)

木棺の眼と眉を表現していた象嵌の一部と考えられる遺物群であり、図6.1の一部と、図7.1の一部のみがシャフト部から出土しており、それ以外は全てA室から出土した。

d) 牙製⁷⁾象嵌 (図7.4, 5)

A室から出土した牙製の遺物であり、象嵌として何らかの副葬品にはめ込まれていたと考えられる。

e) ファイアンス製指輪 (図7.6～9)

図7.6、7.7はA室から出土したもので、やや緑がかった青色、図7.8はシャフト部から出土したもので、同じく緑がかった青色であった。図7.9はB室から出土したもので、白色であった。類例は近隣のサッカ

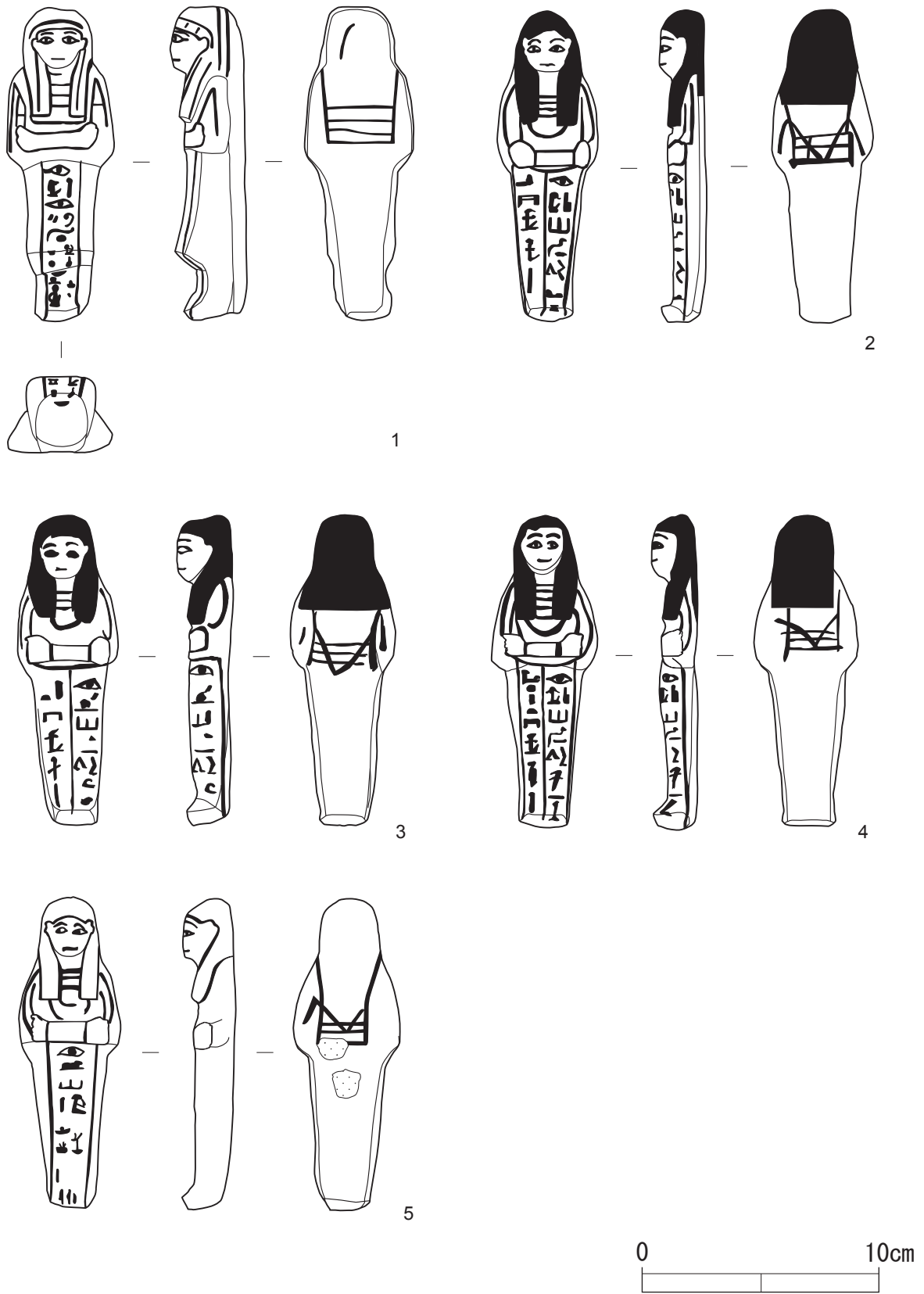


図5 シャフト90出土ファイアンス製シャブティ
Fig.5 Faience Shabtis from Shaft 90

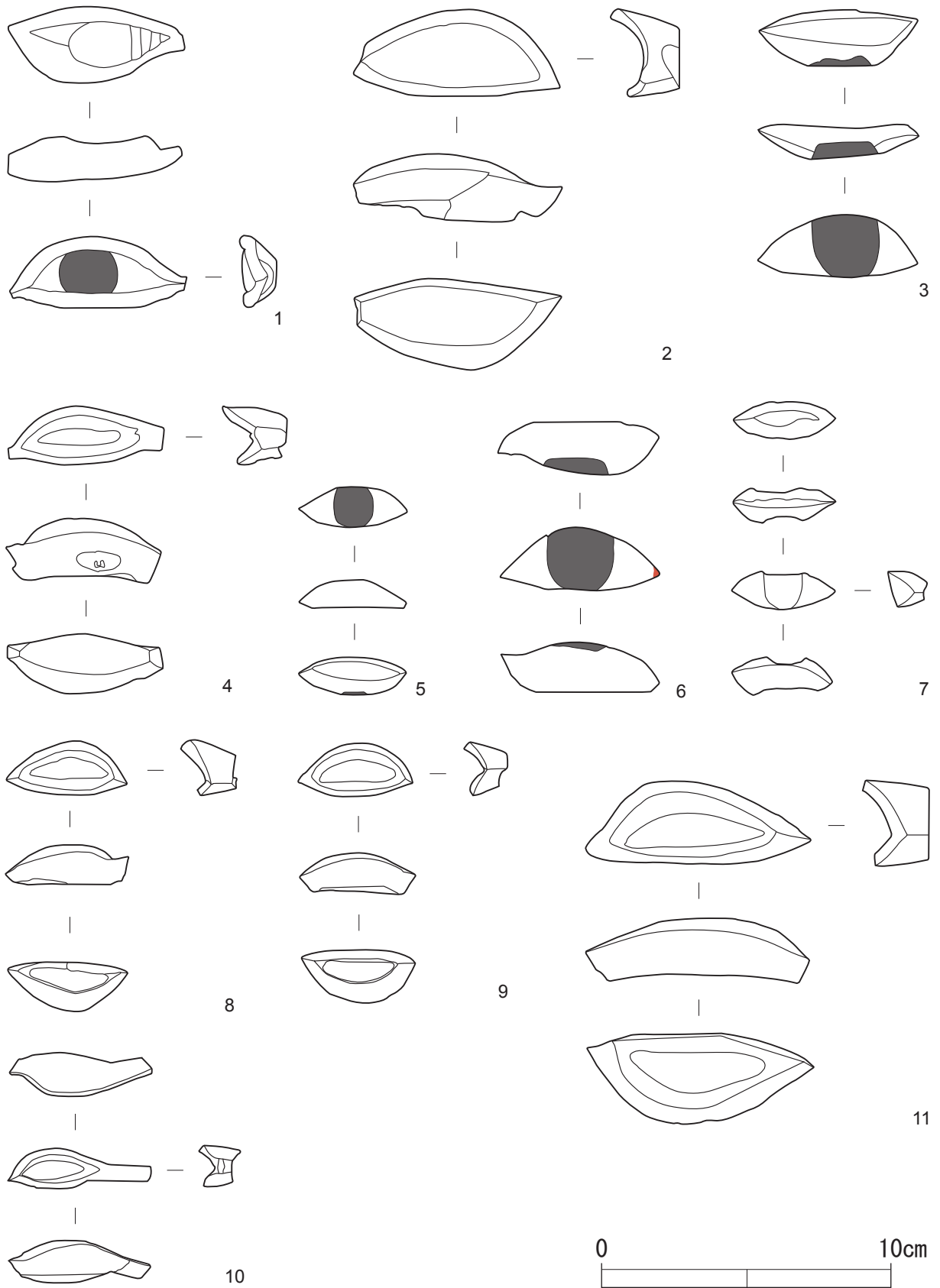


図6 シャフト90出土象嵌（人型木棺の眼）
 Fig.6 Inlaid eyes of anthropoid coffin from Shaft 90

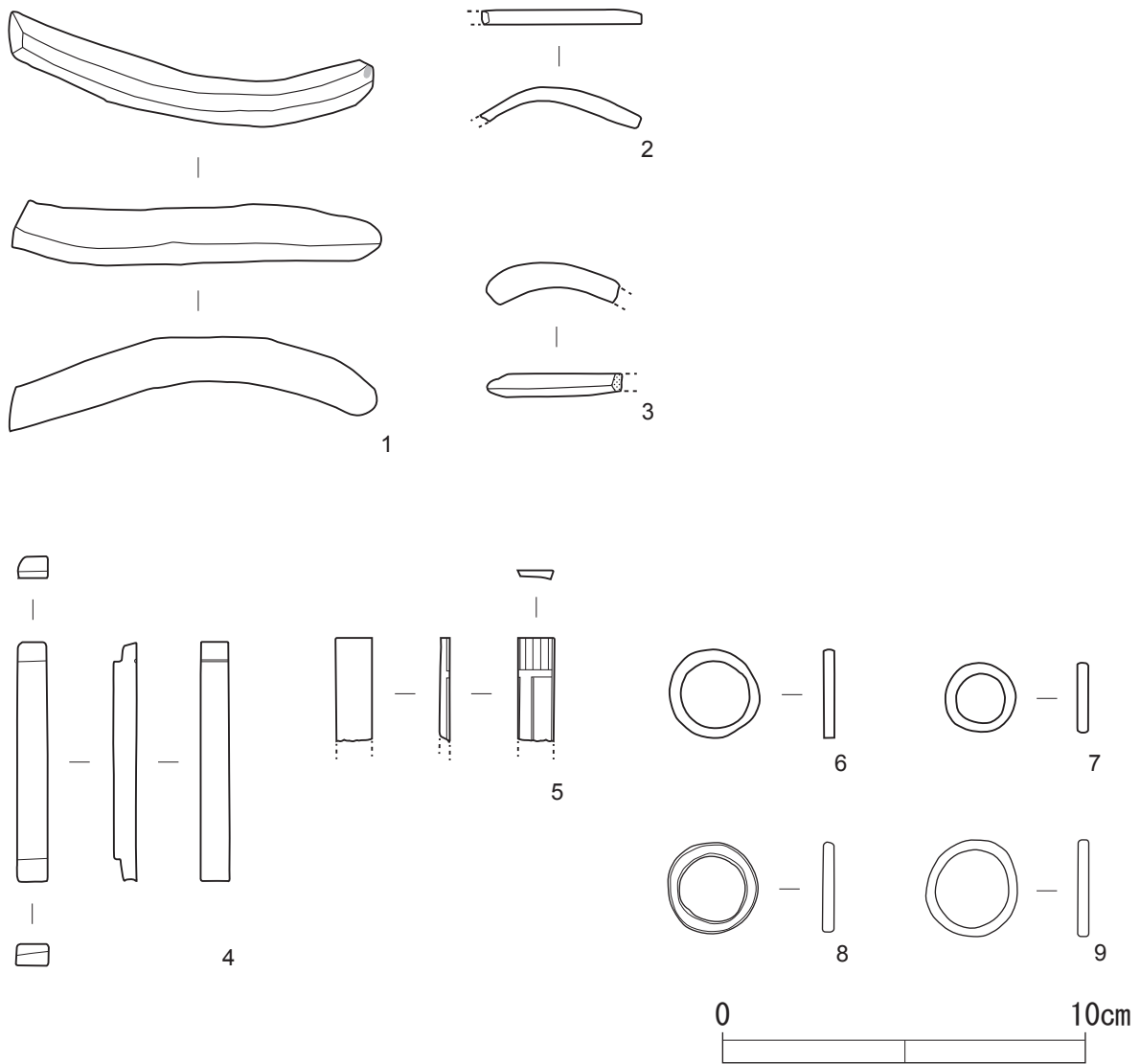


図7 シャフト90出土象嵌・指輪
Fig.7 Parts of inlaid objects and faience rings from Shaft 90

ラで発見されており、第18王朝後期から第19王朝に年代づけられている (Schneider 1996: 49, Cat.306; Martin et al. 2001: 47, Cat.105)。本遺跡のシャフト71からも11点出土した (吉村他 2012: 30, 図9)。

f) ビーズ (図8)

特徴的なものについてだけ述べると、図8.1はB室から出土したスカラベ形の装飾品で、長軸方向に穿孔があった。

図8.2はA室から出土したベス神を象ったと考えられる青色ファイアンス製ビーズである。サッカラのイウルデフ墓やティアとティアの墓から同様の遺物が出土しており、前者は第3中間期、後者は末期王朝時代に年代づけられている (Raven 1991: 43, Cat.68, Pl.46.22; Martin 1997: 78, Cat.123, Pl.174)。

図8.3は何らかの動物を象ったファイアンス製のビーズであり、カバとも考えられるが、サッカラのイウルデフ墓から発見された例では“sow (ブタの雌)”と報告されており、第3中間期に年代づけられている (Raven 1991: 44, Cat.72, Pl.46.23)。グループでも同様の例が出土していた (Brunton and Engelbach 1927: 11,

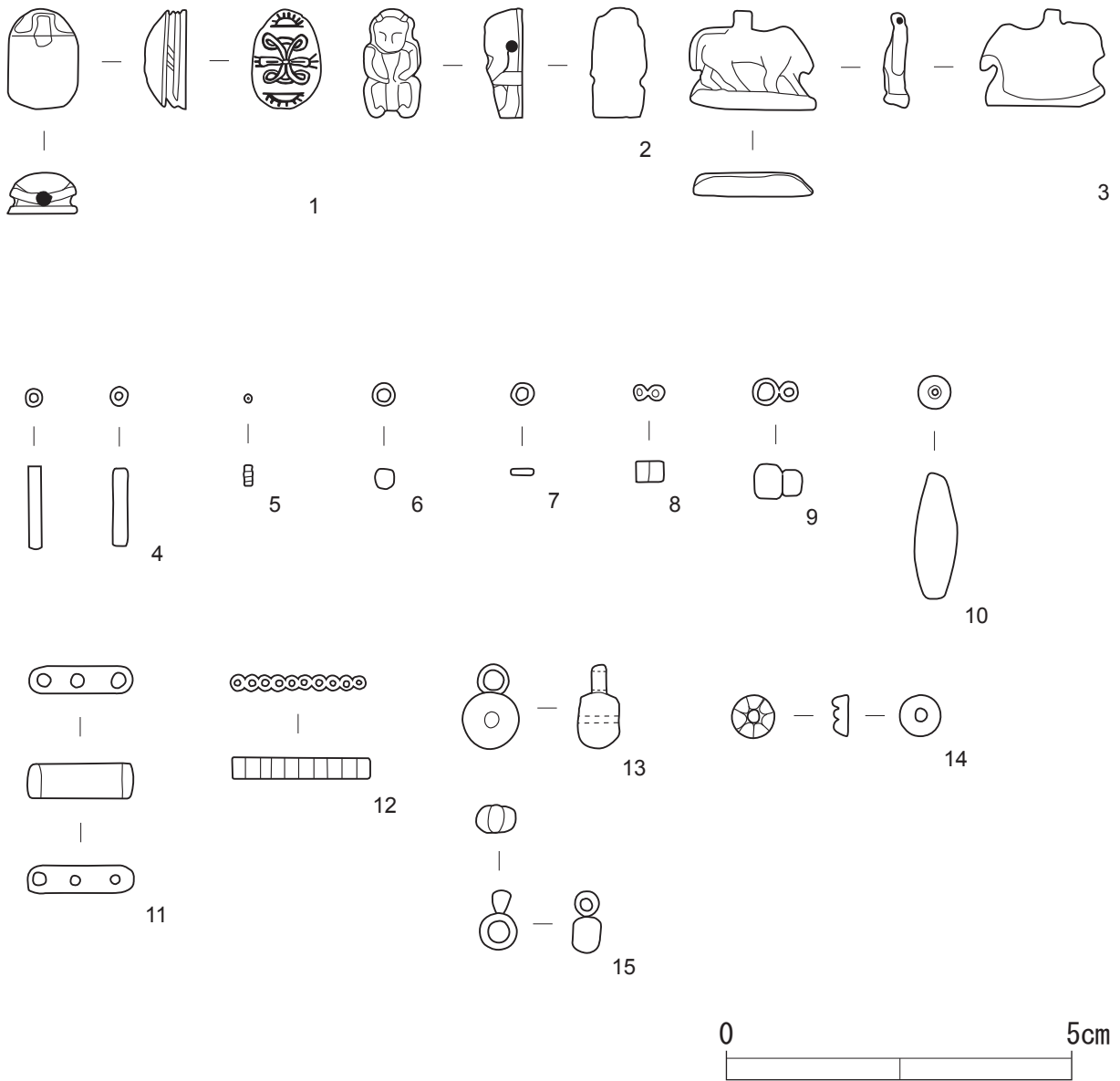


図8 シャフト90出土ビーズ
Fig.8 Beads from Shaft 90

Pl.XXX.17, 24)。

g) 土器 (図9)

図9.3はA室北東コーナー付近で床面の直上から発見された。完形であり、土器の内面には泥状の付着物が見られた。それ以外は接合によって復元されたが、シャフト部、A室、B室、C室の様々な場所で発見された断片が1つの個体として接合する例が多く、激しく攪乱されていたことが推察される。

年代を示す特徴的な器形としてあげられるのはアンフォラであり、図9.12は器形からD.アストンによるType C1と考えられ、ラムセス2世治世からラムセス4世治世までの期間に類例が認められている (Aston 2004: 195-197)。図9.13、9.14のような幅広の形状で底部がわずかに尖底となっているアンフォラはD.アストンによるType B2に相当すると考えられ、ラムセス2世治世からセットナクトまたはラムセス3世治世頃

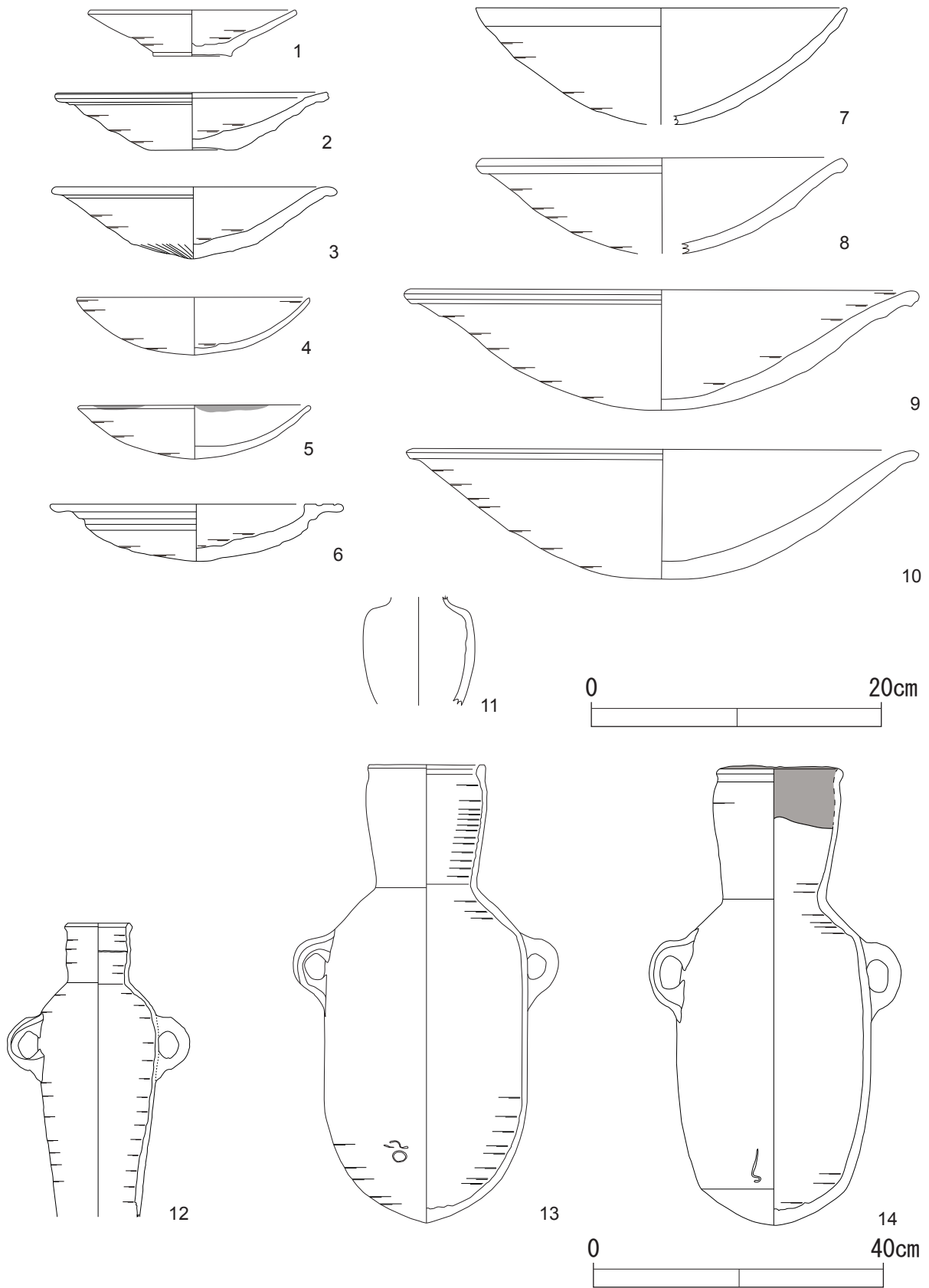


図9 シャフト90出土土器
Fig.9 Pottery vessels from Shaft 90

まで使用されていたと考えられている (Aston 2004: 191-193)。

(2) シャフト 95

①遺構の概要 (図 10)

シャフト 95 はグリッド 3E2 に位置し、2008 年第 14 次調査での地上部の発掘でシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸は南北方向であり、平面の大きさは南北 2.3m、東西 0.9m、シャフト部の深さは 2.9m であった。シャフトのほぼ最下部から西側に、南北に長い長方形の平面を有する部屋が作られていた。部屋は南北 1.9m、東西 0.4m、床面から天井までの高さが 0.8m であった。幅が 0.4 m であり、別個の埋葬室としては狭く、シャフトの底に棺と副葬品を置くためのスペースを確保する拡張という性格のものであったと推測される。

内部は盗掘による攪乱を受けており、土器片、骨、彩色プラスタール片、石灰岩片のみが出土した。

②出土遺物

a) 土器 (図 11)

本来の形状を復元できたのは 1 点のみであり、平底、短頸の壺形土器である。この器形は墓やファウンデーション・デポジットなどで発見されており、アメンエムハト 2 世治世からアメンエムハト 3 世治世に年代づけられている (Schiestl and Seiler 2012: 994-995)。

(3) シャフト 96

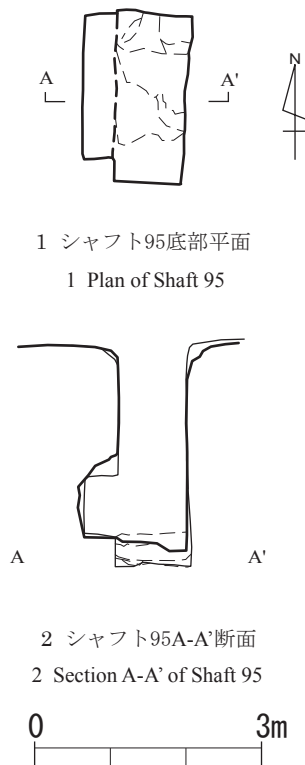


図 10 シャフト 95 平面・断面図
Fig.10 Plan and Section of Shaft 95

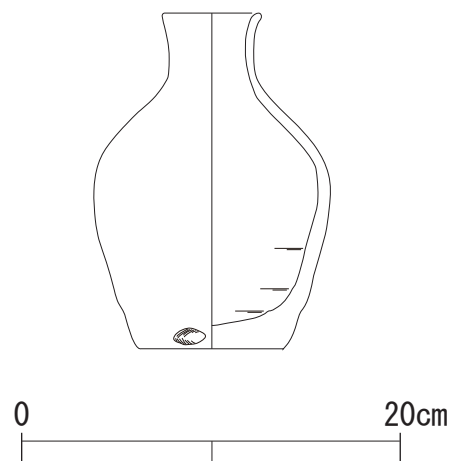


図 11 シャフト 95 出土土器
Fig.11 Pottery vessel from Shaft 95

①遺構の概要 (図12)

シャフト96はグリッド3E2に位置し、2008年の第14次調査での地上部の発掘でシャフト開口部が発見されていた。開口部の長軸は東西方向であり、平面の大きさは南北1.1m、東西2.1m、シャフト部の深さは7.2mであった。シャフト最下部から西側に部屋が発見された (A室)。シャフト部の床面は西側のA室開口部が

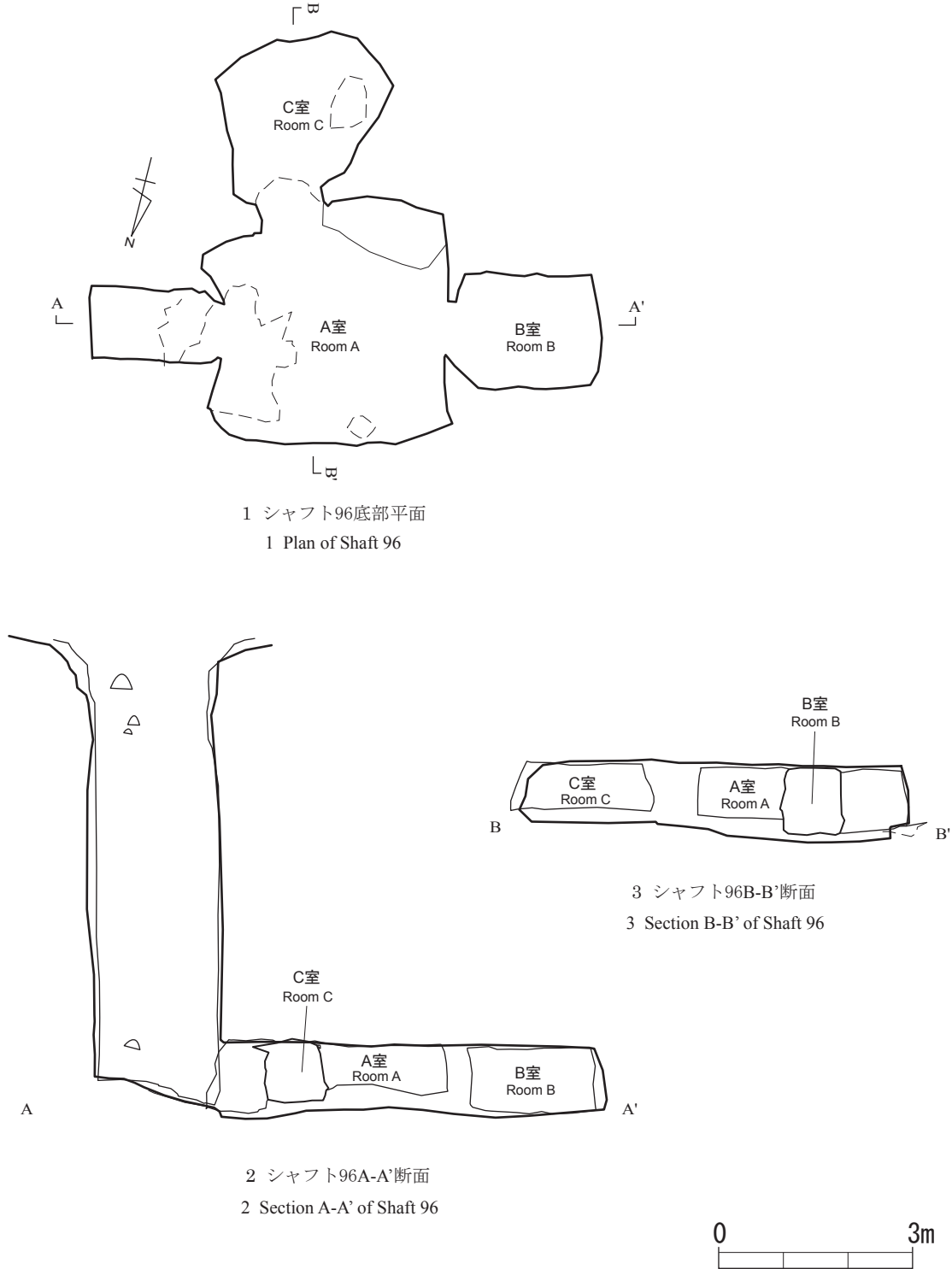


図12 シャフト96平面・断面図
Fig.12 Plan and Section of Shaft 96

わずかに低くなるように、緩やかに傾斜していた。A室の平面は方形に近く、南北2.5m、東西3.8m、床から天井までの高さが1.3mであった。A室の西側と南側には別の部屋が設けられていた（それぞれB室、C室）。西側のB室は方形に近い平面であり、南北1.7m、東西2.0m、床から天井までの高さが1.0mであった。南側のC室の平面は南に向かって幅広になる台形状であり、南北1.4m、東西の最長部が2.7m、床から天井までの高さが1.0mであった。

シャフト部は黄色の砂によって満たされており、A室開口部前のレベルから板状の石灰岩の断片が複数出土した。同じ場所から陶製のシャブティの断片が発見された。A室内部はタフラ混じりの砂層が厚く堆積しており、南西コーナー付近にはタフラ塊を主体とする堆積があった。タフラ塊の堆積内からは何も発見されておらず、おそらくB室もしくはC室を掘削した際の廃土と考えられる。シャフト96出土遺物の大部分はA室の砂層から出土しており、陶製と木製のシャブティ、木棺片、人型木棺の眼と眉の象眼、ビーズ、土器片、金箔片、骨、彩色プラスターなどが出土している。

②出土遺物

a) シャブティ (図13、14)

図13は陶製のシャブティであり、背面、底面と前面の上半部および銘文帯が黄色で彩色されていた。鬘や眼、口、手や持ち物など細部の表現や、銘文は黒色によって描かれていた。図13.1はシャフト部とA室から発見された断片が接合されたもので、図13.2はA室、図13.3はC室から発見された。これらは開放型の鋳型を利用して作られていたようであり、前面が型にはめ込まれ、背面の余った粘土を指で縦方向に調整した痕跡が残されていた。こうした特徴は新王国時代の陶製のシャブティに良く見られるものであり、第19王朝末頃から陶製のシャブティの利用例は増加すると言われている (Schneider 1977: 237)。類例はサッカラのティアとティアの墓からも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Martin 1997: 71, Cat.44)。

図14はA室から発見された木製シャブティの一部である。図14.1、14.2は木の材の上に直接黒色の線で細部の表現や銘文帯が描かれていた。銘文帯には *shd 3sir B-wsrt ʕnh ti* 「セヘジュ、オシリス タ・ウセルト⁸⁾ 生きよ」と書かれていた。両者とも背面には欠損部分をプラスターで補っている箇所があった。

図14.3は全面が黒色に塗られた木製シャブティである。銘文などは記載されていなかった。同様の例はサッカラでも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Martin et al. 2001: 40, Cat.29a, Pl.77)。

b) 象嵌 (図15.1～6)

全てA室から出土したものであり、図15.1は木棺の眼、図15.2～4は眉の部分と考えられる。図15.5は白色ガラス製で、木棺もしくは何らかの木製品の装飾として使用されていたと考えられる。図15.6は赤色ガラス製であり、人型棺の象眼装飾として使用されたと考えられ、いわゆるセウエレット・ビーズであった可能性がある。類例はサッカラでも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Raven 2005: Cat.194, Pl.96)。

c) ビーズ (図15.7～21)

ファイアンス製もしくはガラス製のビーズであり、全てA室から出土した。

d) アミュレット (図15.22, 23)

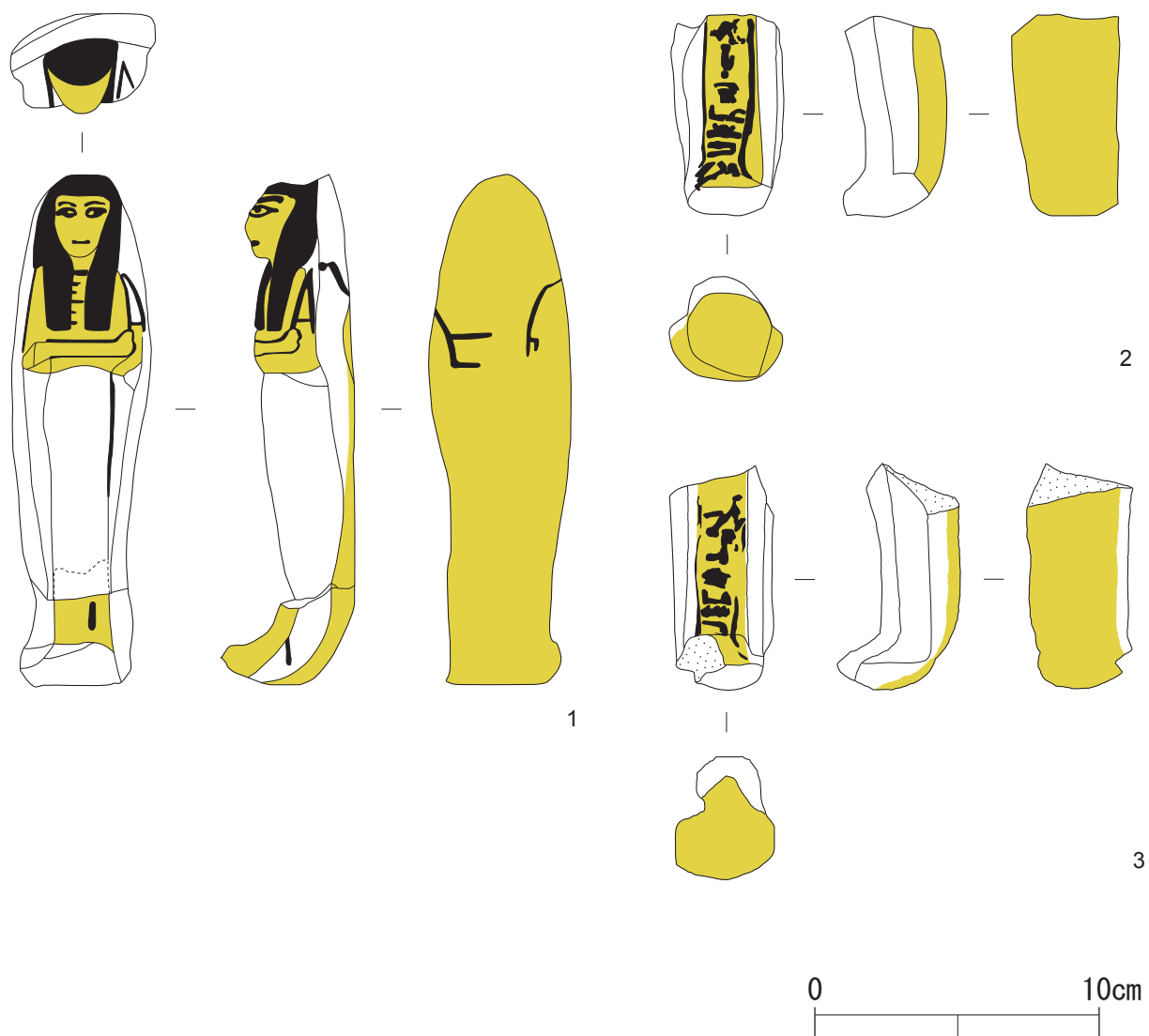


図 13 シャフト 96 出土陶製シャブティ
Fig.13 Pottery shabtis from Shaft 96

図 15.22 は青色ファイアンス製で、パピルスの杖を象ったものと考えられる。同様の例はサッカラのティアとティアの墓、マヤとメリトの墓から出土しており、末期王朝時代に年代づけられている (Martin 1997: 78, Cat.132, Pl.174; Raven 2001: 48-49, Cat.242-244, Pl.21)。図 15.23 は白色のファイアンス製であり、断片的であるため本来の形状を推定することができなかった。

e) 石製容器 (図 16.1)

A 室から発見されたものであり、断片のため全体像は不明である。頸部と肩部と胸部の3つの部分に分割された石製容器が本遺跡のシャフト 105 から発見されており (吉村他 2013: 25, 図 10.1)、そのうちの頸部と類似している。

f) 土器 (図 16.2 ~ 5)

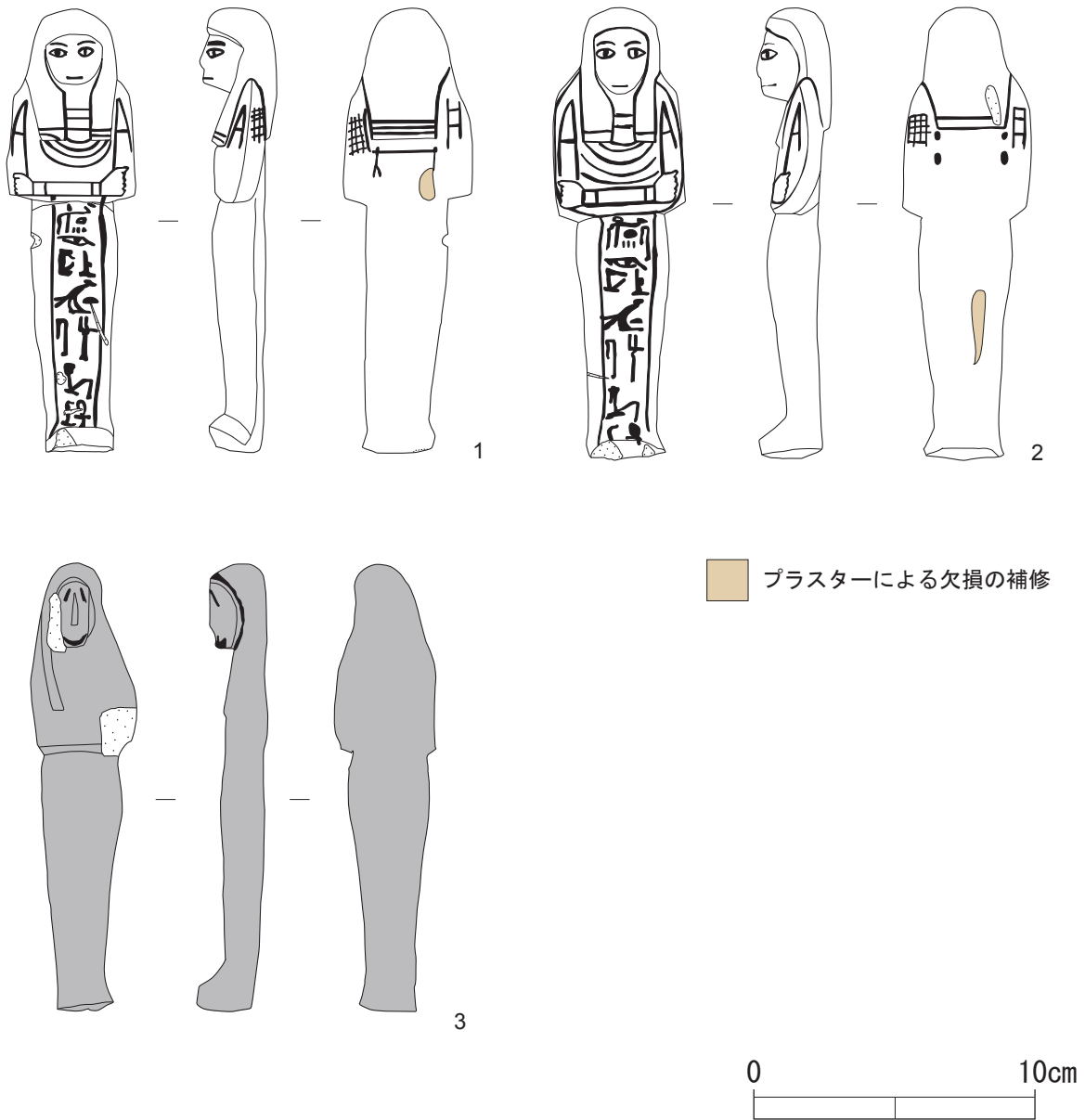
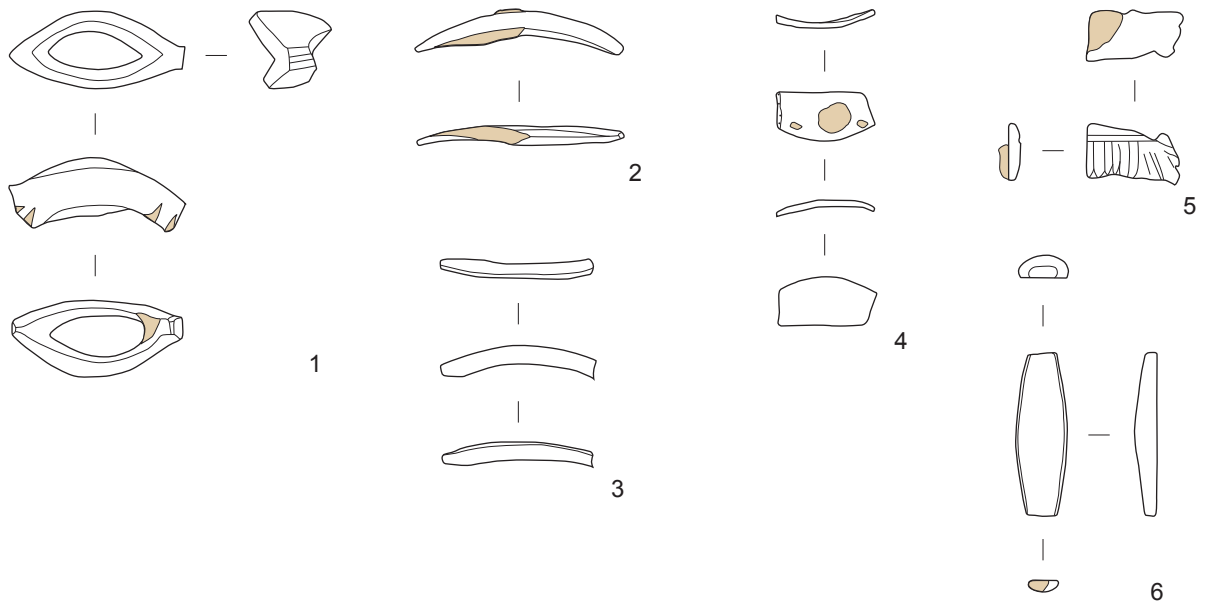


図14 シャフト96出土木製シャブティ
 Fig.14 Wooden shabtis from Shaft 96

図に挙げられているものは全てA室から発見された。図16.2は特徴的であり、底部が内側に向かって窪み突起を成しており、全面に赤色スリップが塗布され、軽くミガキが施されている。外面は火を受けたことによる黒変が認められた。グループで類例が発見されており、セティ2世頃とされているが (Petrie 1891: 18, Pl.XIX.15)、D. アストンは紀元前12～10世紀 (Phase I, Aston 1996: 61, Fig.190) という年代を与えている。

(4) シャフト113



■ プラスター付着部

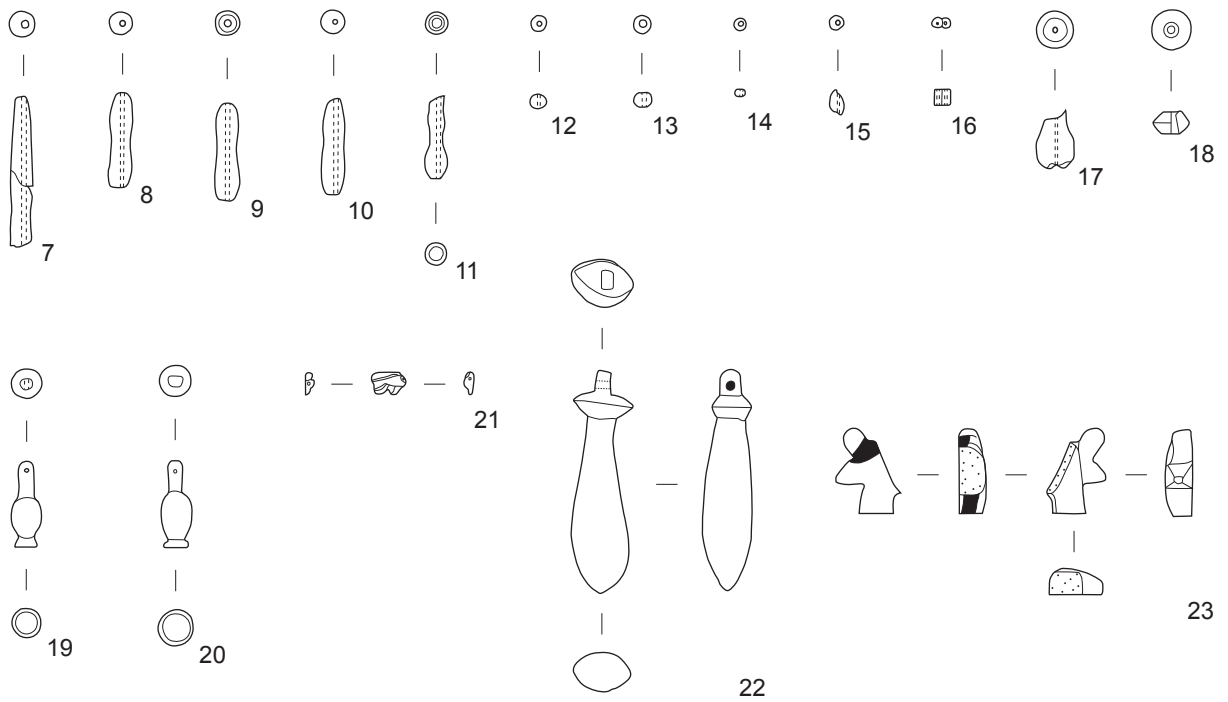


図15 シャフト96出土象嵌・ビーズ・アミュレット
Fig.15 Inlays, beads and amulet from Shaft 96

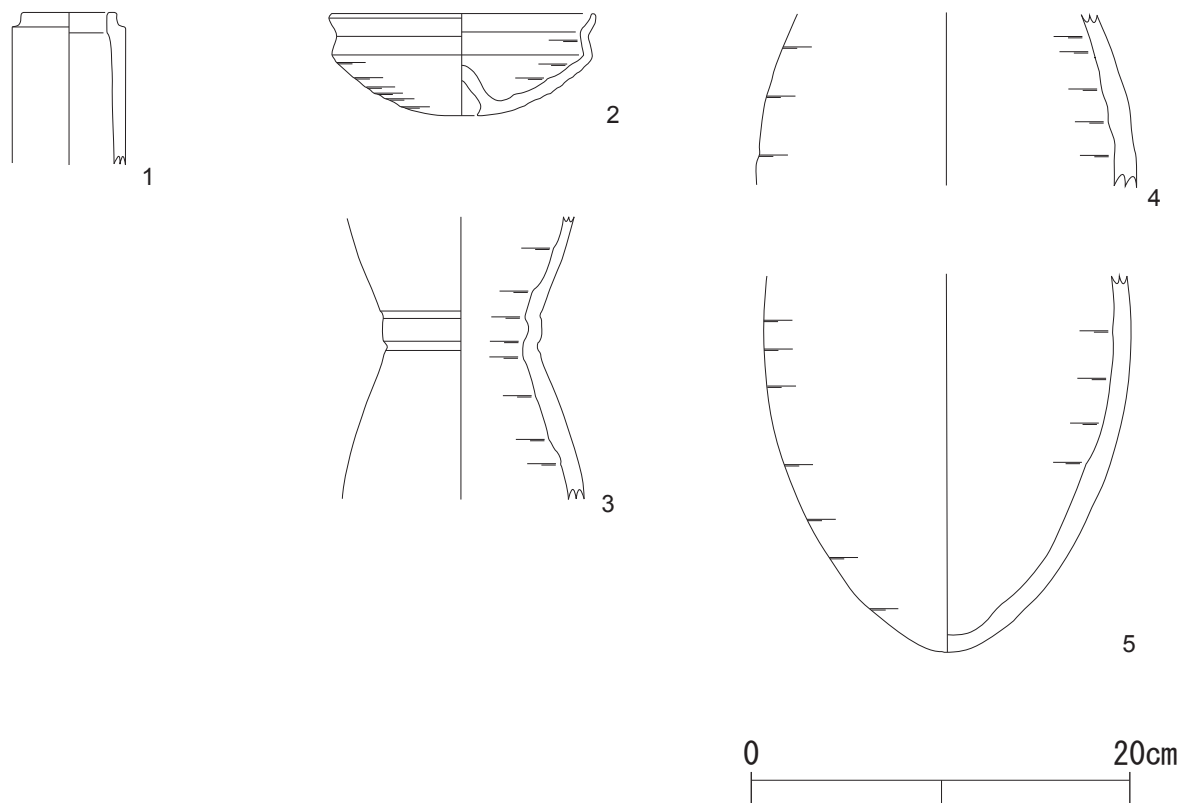


図16 シャフト96出土石製容器、土器
Fig.16 Stone and pottery vessels from Shaft 96

①遺構の概要 (図17)

シャフト113はグリッド3E42に位置し、今次調査の地上部の発掘によって発見された。シャフト開口部の長軸は南北方向であり、平面の大きさは南北1.9m、東西0.7m、シャフト部の深さは2.8mであった。シャフト最下部から南側に部屋が発見された(A室)。A室の平面は南北に長い長方形であり、南北1.9m、東西0.7m、床から天井までの高さは1.3mであった。シャフト部からA室にかけての床面は、北側から南側に向かって緩やかな傾斜となっている。

シャフト113のA室にはおそらく中王国時代に典型的な箱型木棺が納められており、そこに水が流入し、木棺とA室壁との隙間や、木棺の下部に横方向に置かれた、木棺を支える「足」となっている4本の部材の間に水に溶けたタブラが流入し、乾燥して固まったと推測される。その後木棺は崩壊したが、その周囲にあったタブラは壁となって残った(写真1)。タブラの西側壁の下部にはまだ木棺の側面下部の部材が貼り付いていた。木棺の表面の装飾がそのままタブラの壁に残っていたことや、発見された木棺の部材から、木棺の本来の姿は長手方向の側面に4本の銘文帯があり、短手方向の側面に2本の銘文帯があるタイプの木棺(H. ウィレムズによる分類の Type IV、Willems 1988: 136-137)であることが分かった。銘文は青色で書かれていたが、被葬者の名前や銘文の内容については断片的であるため判読することができなかった。このタイプの木棺に一般的に描かれるウジャトの眼の、下にあたる箇所(東壁の北側下部)には偽扉の装飾があったことも、壁に残された痕跡から明らかになった(写真2)。残された部材と壁面から、この木棺の平面の大きさは長さ190cm、幅58cmであったと考えられる。

木棺片以外の遺物としては、土器とその封泥、骨が出土した。

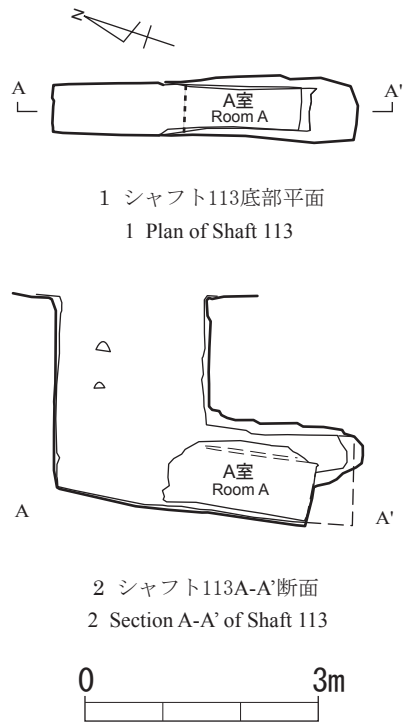


図17 シャフト113平面・断面図
Fig.17 Plan and Section of Shaft 113

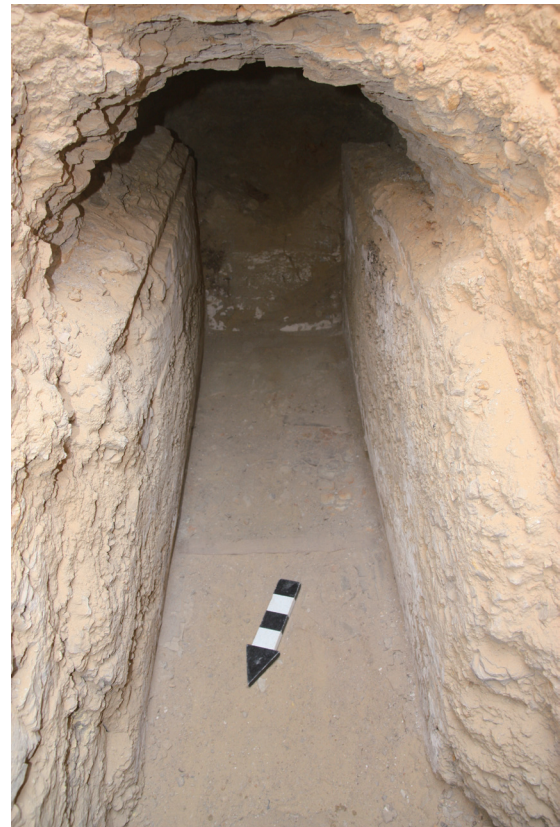


写真1 シャフト113 A室のタフラの壁
Photo 1 *Tafta* wall of Room A in Shaft 113



写真2 シャフト113 A室東側タフラ壁に残った木棺のファサード装飾
Photo 2 Trace of façade decoration of coffin remained on eastern *Tafta* wall of Room A in Shaft 113

②出土遺物

a) 土器 (図 18)

図 18.1 はシャフト部から出土した Nile B2 のミニチュア平底皿形土器、図 18.2 はシャフト部と A 室で発見された断片から接合された Nile C の大型の丸底壺形土器である。後者は R. シストルと A. ザイラーによる分類では Class 5 に相当すると考えられ、第 13 王朝初期に年代づけられる (Schiestl and Seiler 2012: 672-673) 9)。

(5) シャフト 122

①遺構の概要 (図 19)

シャフト 122 はグリッド 2E48 北東部に位置し、今次調査の地上部の発掘によって発見された。シャフト開口部の長軸は東西方向であり、平面の大きさは南北 0.9m、東西 1.7m、シャフト部の深さは 4.5m であった。シャフト上部は石灰岩ブロックによる壁体が残存していた。シャフト最下部から西側に部屋が発見された

(A 室)。A 室の平面は東西にやや長い長方形であり、南北 1.5m、東西 2.7m、床から天井までの高さが 1.6m であった。A 室の南側は隣接するシャフト 123 のシャフト部に繋がっており、開口部には日乾煉瓦によって封鎖壁が築かれていた。封鎖壁は床面から高さ 0.7m まで残存していた。

シャフト部は主に細砂によって満たされており、A 室開口部前からレリーフ片と木棺片が発見された。A 室はタフラ粒が混じる砂層が厚く堆積しており、木棺片、土器片、骨などが出土した。

②出土遺物

a) 石灰岩製レリーフ (図 20)

シャフト部の A 室開口部前のレベルから出土した。沈み浮き彫りで、5 人の人物が左側に向かって礼拝をする姿が描かれていた。左から 2 番目と 3 番目の女性は右手にシストラムを持っており、3 番目の女性は左手にパピルスを持っている。1 番目と 2 番目の人物の間には *nbt pr šmꜣyt ..* 「家の女主人、歌い手」、2 番目と 3 番目の人物の間には *s3t=s šmꜣyt ...* 「彼女の娘、歌い手」と書かれていた。厚さが約 8cm で薄いことから、ステラの一部であった可能性が考えられる。

b) 木棺片 (図 21)

図に掲載したものは両者ともシャフト部の A 室開口部前からまとめて出土した。図 21.1 は人型木棺頭部の断片で、鬢にはロータスの図像が赤の線で描かれており、肌の部分は赤褐色に塗られていた。眼と眉の輪郭は黒色によって描かれており、唇の輪郭は赤色の線によって書かれていた。ロータスを鬢の中央に配す

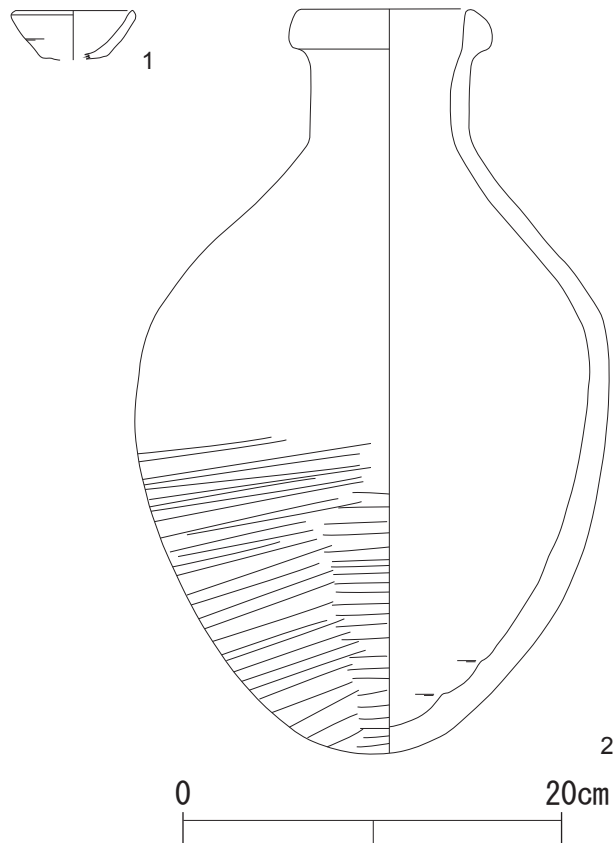
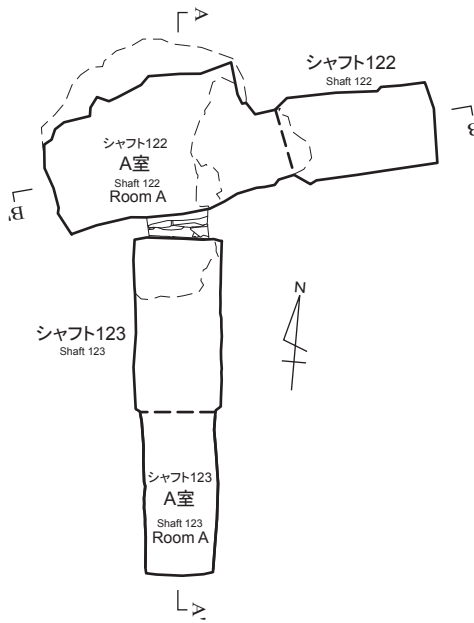
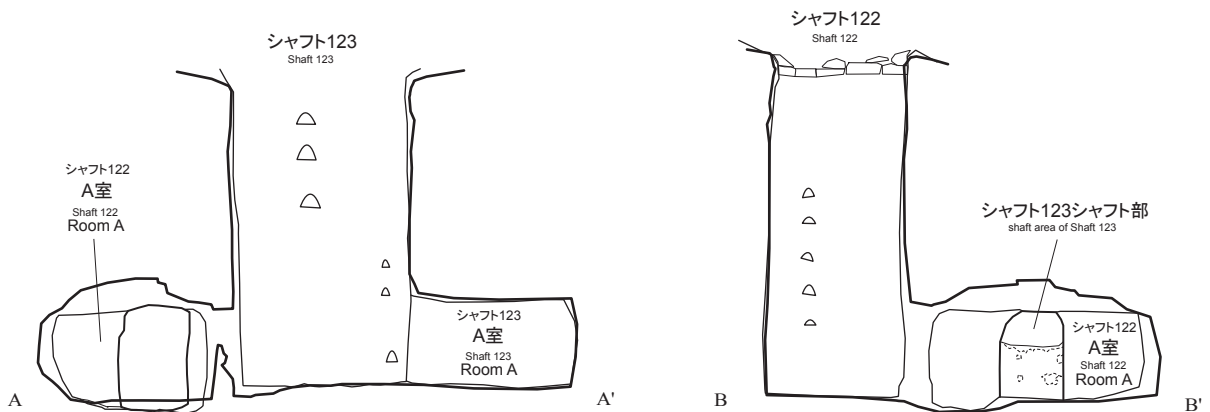


図 18 シャフト 113 出土土器
Fig.18 Pottery vessels from Shaft 113



1 シャフト122、123底部平面
1 Plan of Shaft 122, 123



2 シャフト122、123A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 122, 123

3 シャフト122、123B-B'断面
3 Section B-B' of Shaft 122, 123

図19 シャフト122、123平面・断面図
Fig.19 Plan and Sections of Shaft 122 and 123

るのは第19～20王朝の黄色を背景に持つ木棺によく見られる特徴である (Niwinski 1988: 12)。図21.2は人型木棺の右手部分であり、表面は同様に赤褐色で肌の色が表現されていた。

(6) シャフト123

①遺構の概要 (図19)

シャフト123はグリッド2E48北東部に位置し、今次調査の地上部の発掘によって発見された。シャフト開口部の周囲は南北5m、東西4mほどの範囲で浅く掘り込まれていた。シャフト開口部の長軸は南北方向

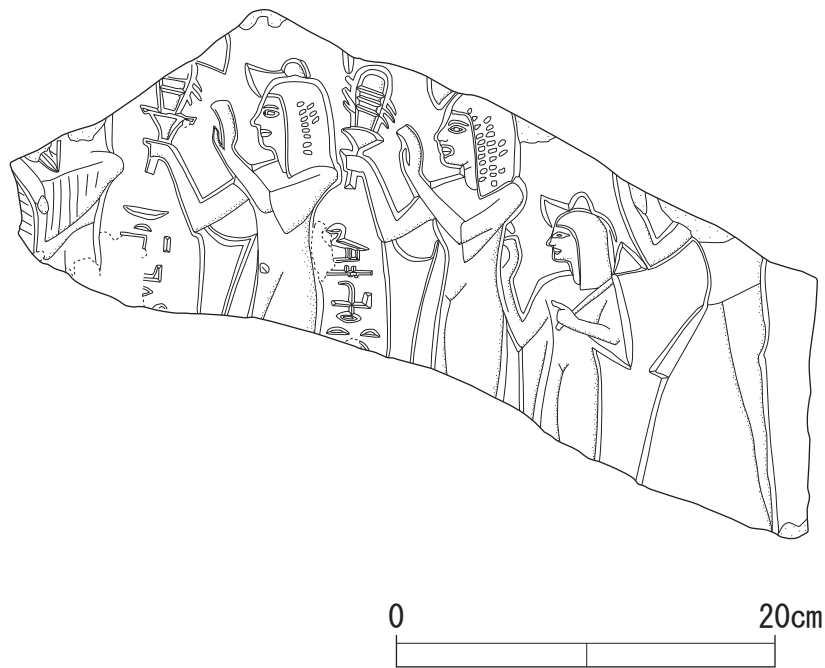


図20 シャフト122出土石灰岩レリーフ
Fig.20 Limestone relief fragment from Shaft 122

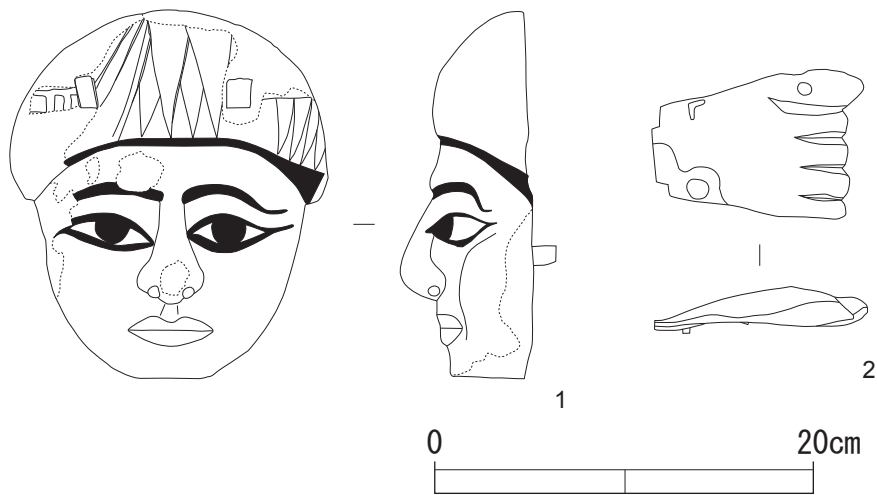


図21 シャフト122出土人型木棺片
Fig.21 Fragments of wooden anthropoid coffin from Shaft 122

であり、平面の大きさは南北2.3m、東西1.1m、シャフト部の深さが4.2mであった。シャフト最下部から南側に部屋が作られていた（A室）。A室の平面は南北に長い長方形であり、南北2.1m、東西0.9m、床から天井までの高さは1.2mであった。シャフト最下部の北壁は前述のシャフト122のA室に通じる開口部があった。

シャフト部の床面に近い褐色のタフラ粒が混じった層からは中王国時代に年代づけられる土器片が数多く出土した。完形の大型丸底壺形土器（図23.13）が、A室開口部前、シャフト部の南東コーナー付近の床面

直上から発見された。その傍らからこの土器のものと思われる封泥も出土した。ちょうど対となる位置、すなわちシャフト部北西コーナーからも上部が失われた大型丸底壺形土器(図24.1)が床面直上から出土した。出土状況から見て、これらの土器群は埋葬時の状況をそのままとどめており、おそらく北側にも本来は埋葬室があったものと推測される。シャフト123への開口部は、シャフト122のA室が掘削された段階で貫通したものではなく、もともとシャフト123の北側に埋葬室の空間があり、そこにシャフト122のA室を掘削している段階でぶつかったということである。シャフト123北側開口部の高さがシャフト123のA室とほぼ同一であり、開口部の側面が整形されていることもこの推測を裏付けている。

②出土遺物

a) 石灰岩製ステラ片(図22)

A室から発見されたもので、コーニスを持つステラの右上端である。図像や銘文が描かれるスペースの厚さとシャフト122のシャフト部から発見されたレリーフ片の厚さがほぼ同じであることから、これらの断片は同一の個体に由来する可能性がある。

b) 土器(図23、24)

土器片の多くはシャフト部より発見された。ミニチュアの平底皿形(Nile C、図23.1、2)、高台付鉢形(Nile C、図23.5、6)半球形碗形(Nile B1、図23.8～10)、大型丸底壺形(Nile C 図23.12～18、図24.1、2)などは中王国時代の埋葬でよく見られる器形である。シャフト部の床面直上から発見された大型丸底壺は、R. シストルとA. ザイラーによる分類ではClass 3bに相当すると考えられ、センウセレット3世治世から第13王朝中期までこの器形は認められている(Schiestl and Seiler 2012: 652-656)。さらに、テル・エル＝ダバア出

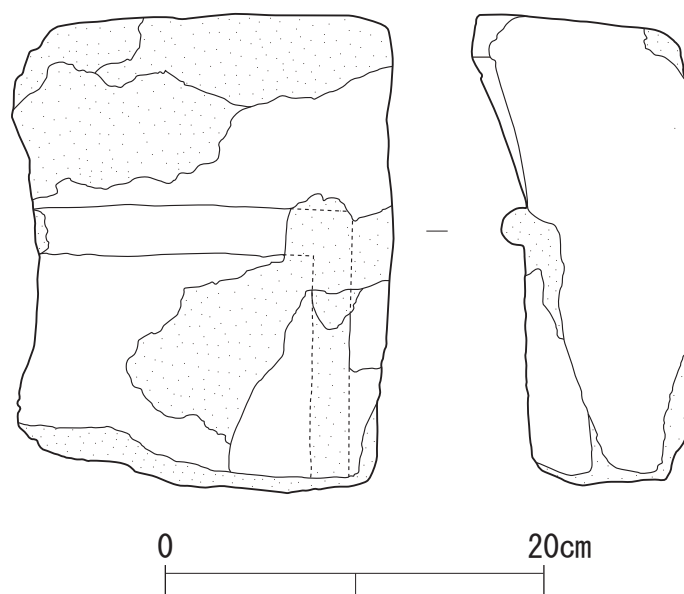


図22 シャフト123出土石灰岩製ステラ片
Fig.22 Fragment of limestone stela from Shaft 123

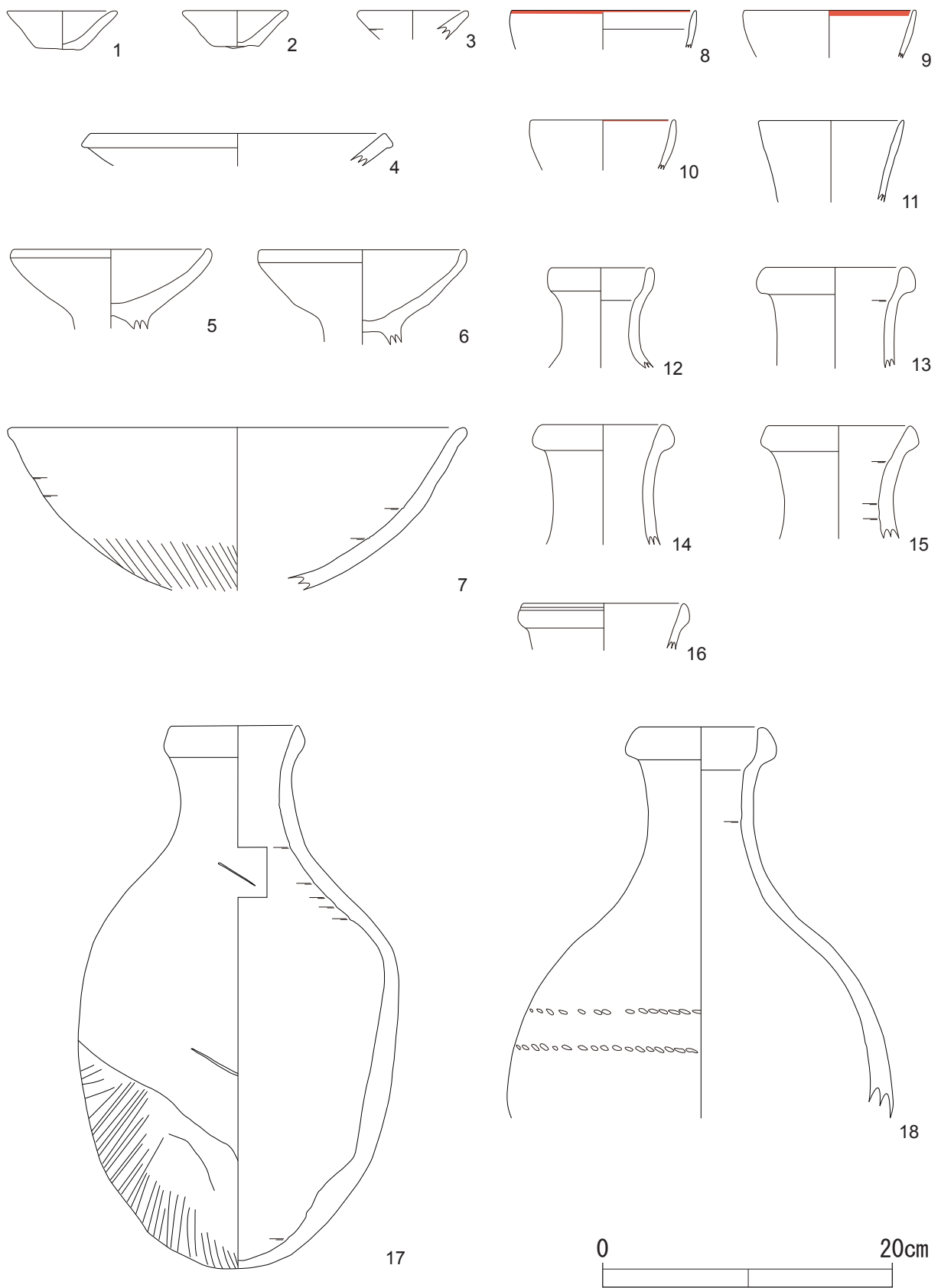


図23 シャフト123出土土器(1)
 Fig.23 Pottery vessels from Shaft 123 (1)

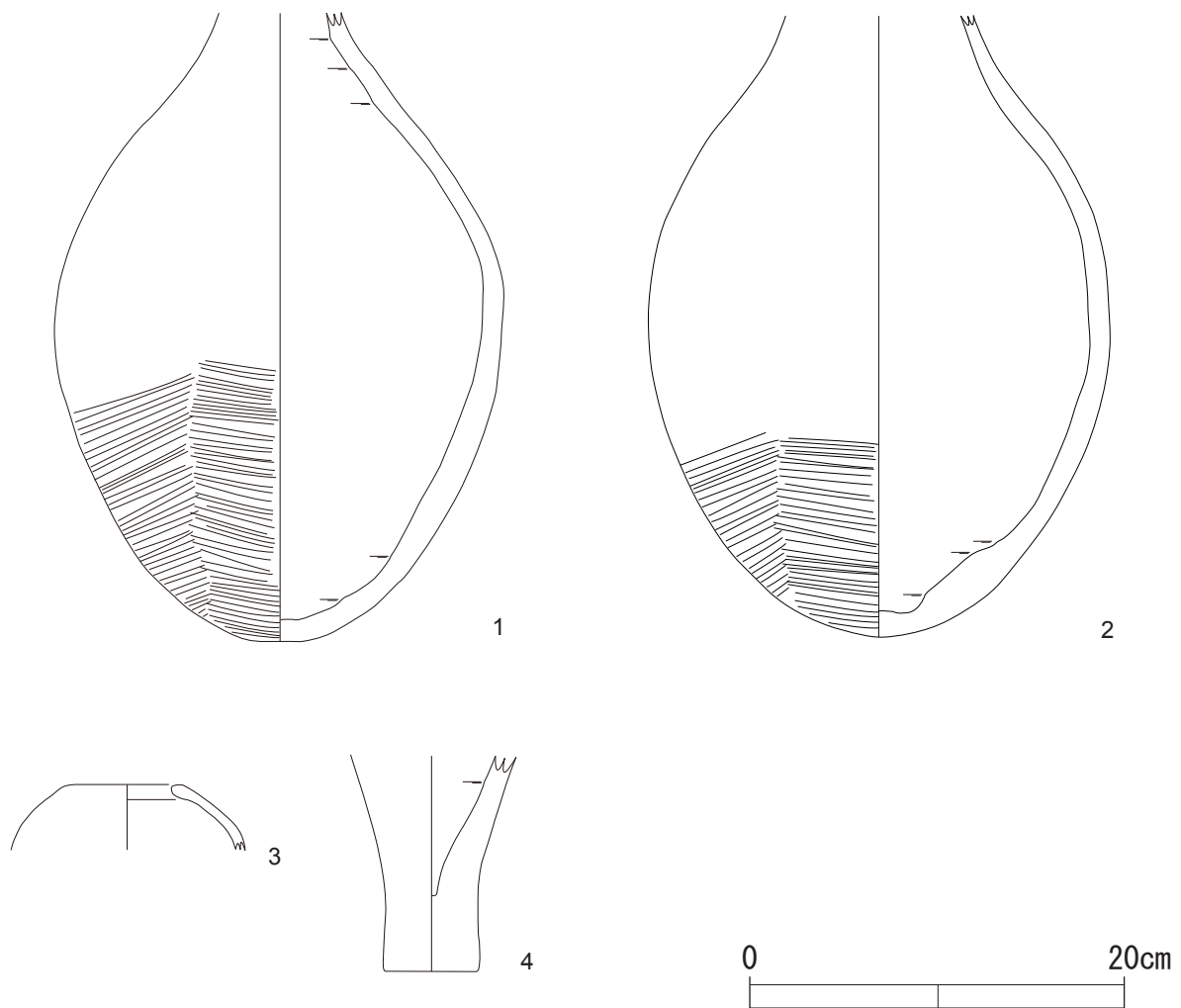


図24 シャフト123出土土器(2)
Fig.24 Pottery vessels from Shaft 123 (2)

土の同器形の年代に関する研究 (Szafranski 1998) の基準に従うならば、この中でも第13王朝初期に年代づけられることになる¹⁰⁾。

4. 土壙墓の発掘調査

(1) 土壙墓 19p-011 (図 25.1, 2)

①遺構の概要

土壙墓 19p-011 はグリッド 2E50 に位置しており、今次調査での地上部の発掘によって発見された。土壙は南北に長く、南北 1.0m、東西 0.3m、深さ 0.4m であった。土壙の内部にはタフラ粒を含む赤褐色の砂層があり、その下から植物のマットにくるまれた埋葬が未盗掘で発見された。埋葬は子供のもので、頭を北側に向け、埋葬姿勢は仰臥位であった。首にあたる部分には渦巻き状の装飾を持つガラス製のビーズ、径 1mm 前後の球状のビーズが複数出土した。それよりやや南側からは金銅製の耳飾りが 1 点発見された。

②出土遺物

a) 金銅製耳飾り (図 26.1)

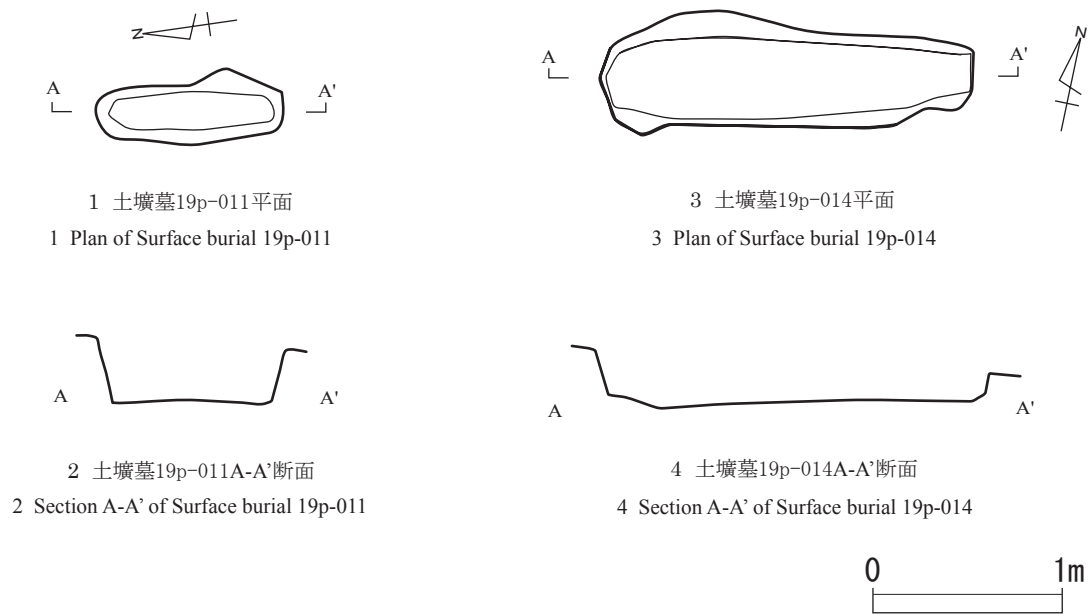


図25 土壙墓 19p-011、19p-014 平面・断面図

Fig.25 Plans and Sections of Surface burial 19p-011 and 19p-014

耳飾りは Leech-shaped (ヒル形) とも称される形状で、新王国時代に類例がある (Andrews 1990: 111, Fig.91g)。本体部分は表裏2枚の部品をつなぎ合わせて造られており、きわめて細いワイヤーを撚り合わせた装飾が、つなぎ目に沿って付けられていた。

b) ガラス製ビーズ (図 26.2、写真 3)

図 26.2 はローゼットを模した特徴的な意匠を持つガラス製ビーズであり、黄色を基調として白色、青色、黒色で模様が描かれていた。完全に同じではないが類例がグラブから出土している (Brunton and Engelbach 1927: Pl.XLIII.46.B-J)。グラブでこの種類のビーズが発見された墓でもほとんどが同様にマットを利用した埋葬だった (墓番号 22、249、276A、456、460、478、490)。



写真3 土壙墓 19p-011 出土ビーズ
Photo 3 Beads from Surface burial 19p-011

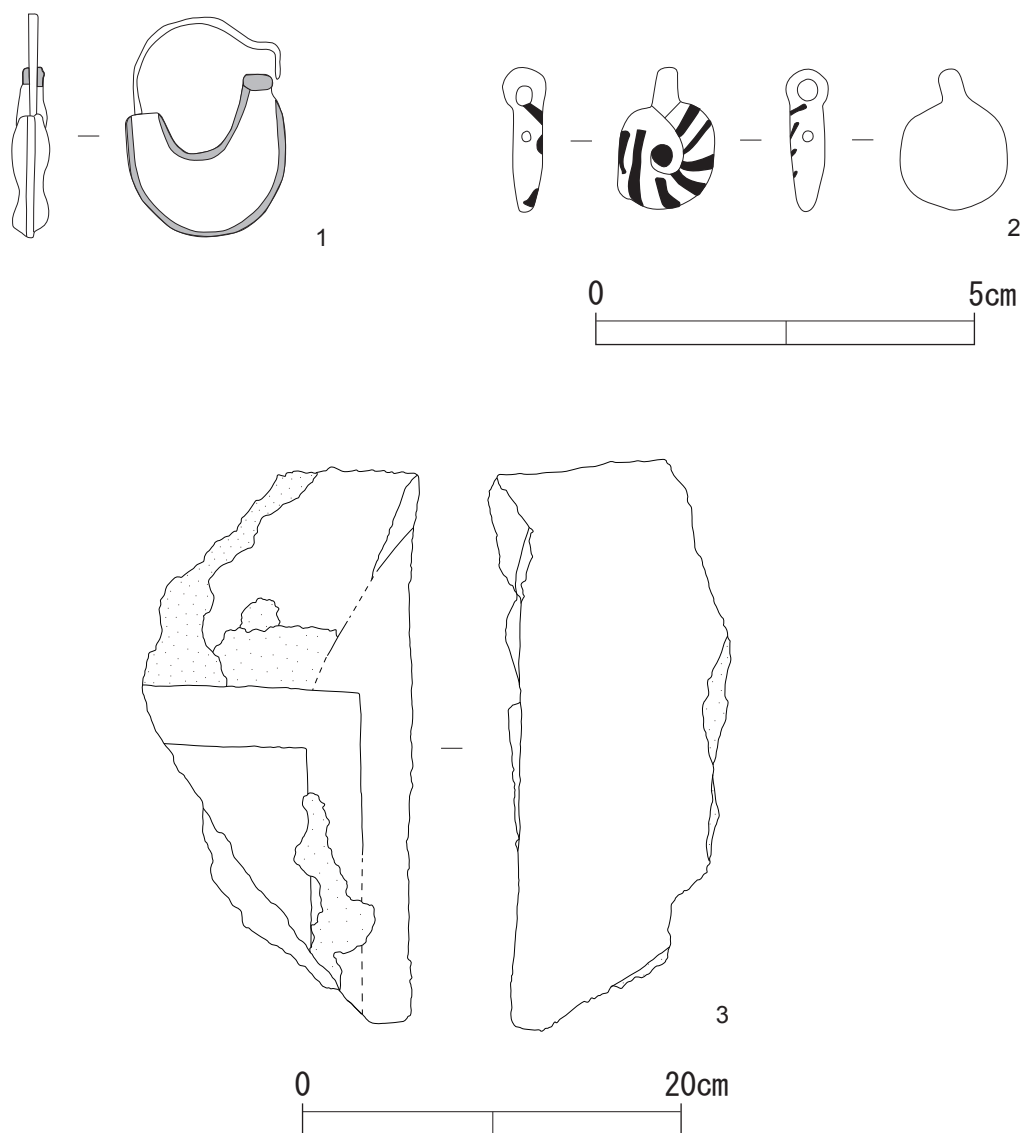


図 26 土壙墓 19p-011、19p-014 出土遺物
Fig.26 Finds from Surface burial 19p-011 and 19p-014

(2) 土壙墓 19o-014 (図 25.3, 4)

土壙墓 19p-014 はグリッド 2E50 の北縁に位置しており、今次調査の地上部の発掘によって発見された。土壙は東西に長く、南北 0.5m、東西 2.0m、深さ 0.4m であった。盗掘による攪乱を受けていたが、西側に頭骨の破片が残存しており、土壙の東側には脚部の骨が出土していることから、おそらく西に頭を向けていたと考えられる。土器片がわずかに発見されたが、断片的であるため、器形を推測するには至らなかった。東端には土壙に蓋をするような形で置かれていた石灰岩片 (図 26.3) が発見されており、コーニスをもつ石灰岩製ステラの右上端の断片と考えられる。

5. おわりに

今次調査でも、中王国時代、新王国時代の2つの時代の埋葬習慣について興味深い資料を取得することができた。

シャフト90および96は激しく攪乱されていたものの、シャブティを中心に第19王朝から第20王朝に年代づけられる遺物群を発見することができた。シャフト90と96は、平面の位置関係からシャフト84（第18次調査、吉村他2012: 17-21）、シャフト86（第15次調査、吉村、近藤、長谷川他2011: 61-65, 70-82）、シャフト88（第14次調査、吉村、近藤、矢澤他2011: 22-23, 46-57）と並ぶ一連のグループのようにも見受けられたが、これらは出土遺物や年代にも差があり、一様ではないことがわかってきた。また、シャフト90と96では、地下室の構成は類似してはいるものの、前者から出土するシャブティはファイアンス製、後者は陶製と木製に限られるように、隣接するシャフトであってもその内容は異なってくる。こうした差異をどう評価していくかは、今後の課題である。

中王国時代については、シャフト墓内部での調査成果もさることながら、地上部での祭祀活動の痕跡が発見されたことは貴重な成果と言える。明確な地上の構造物を持たないシャフト墓での祭祀活動の痕跡は報告例が乏しく、中王国時代の葬送儀礼を考古学の面から補足するものとなる。

土壙墓では植物のマットにくるまれた子供の未盗掘の埋葬を1基発見することができた。装身具の類例を参照すると、同様にマット葬であり、埋葬の形態および被葬者の属性と装身具利用との関係は今後検討に値するだろう。

「タ」墓周辺で集中的に発掘を行ってきたことで、墓域の西端における様相が明らかになりつつある。今後も調査継続することで、墓域全体の形成過程や埋葬習慣を考察するための資料を蓄積していきたい。

註

- 1) 第19次調査の隊員構成は次の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、和田浩一郎、高橋想、北村玲、堀内則子、半田竜介、建築学班：西本真一、X線分析班：中井泉、阿部善也、張本路丹、遠山加奈枝、GIS・探査班：津村宏臣、岸田徹、渡邊俊祐、サイバー大学実習生：荒木利美、大田幸治、大橋陽子、白岩和雄、菅井映子、砥綿宏樹、中達美恵、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。図版の作成は早稲田大学エジプト学研究所の堀内則子、高橋想、半田竜介を中心に行われ、その努力に帰するところが大きい。ここに記して感謝の意を表したい。
- 2) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している (Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 3) テル・エル＝ダバアの資料を用いた大型丸底壺形土器の研究では、(口縁部の最大径) / (口唇の厚み) × 100 という式によって割り出した数値から年代が検討されている。このインデックスはAI (Aperture Index) 2 と呼ばれており、テル・エル＝ダバアのd2層（第12王朝末）では約930から660の範囲で平均711.7、d1層（第13王朝初期）では約640から350の範囲で平均528.8となり、顕著な差が出ることが分かっている (Szafranski 1998: 101, Fig.4)。図2.12は588.2、図2.13は500.0でありこの基準に従うならば、年代は第13王朝初期となる。
- 4) シャフト106の遺構と出土遺物の詳細は第18次調査の概報に記載されている (吉村他2013: 35-41, Fig. 図19～23、写真5)。
- 5) 「イルウイ」で始まる名前だが、その後ろを確定できない。
- 6) Ranke 1935: 71.3。
- 7) 古代エジプトにおいてはカバの牙が象牙に類似する材料として多用されていたと考えられている (Krzyszowska and Morkot 2000: 320)。ここでは専門家による正確な同定を行っていないため、牙製という言葉を用いた。
- 8) Ranke 1935: 355.22。
- 9) 前述のAI (Aperture Index) 2では423.8となり、d1層（第13王朝初期）の範囲に含まれる。
- 10) 前述のAI (Aperture Index) 2では445.5となり、d1層（第13王朝初期）の範囲に含まれる。なお、その他の大型丸底壺のAI2については次の通りである。図23.12: 468.8、図23.13: 584.2、図23.14: 555.6、図23.15:

611.1、図 23.16 : 705.9、図 23.18 : 460.9。

参考文献

- Andrews, C.
1990 *Ancient Egyptian Jewellery*, London.
- Aston, D.A.
1996 *Egyptian Pottery of the Late New Kingdom and Third Intermediate Period (Twelfth – Seventh Centuries BC)*, Heidelberg.
2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante XIV*, pp.175-213.
- Baba, M. and Yoshimura, S.
2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, in Bárta, M, Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the year 2010*, vol.1, Prague, pp.158-170.
- Brunton, G. and R. Engelbach
1927 *Gurob*, London.
- Krzyszowska, O. and Morkot, R.
2000 “Ivory and related materials”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.320-331.
- Martin, G.T.
1997 *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London.
2001 *The Tombs of Three Memphite Officials: Ramose, Khay and Pabes*, London.
- Niwinski, A.
1988 *21st Dynasty coffins from Thebes: Chronological and typological studies*, Mainz am Rhein.
- Petrie, W.M.F.
1891 *Illahun, Kahun, and Gurob*, London.
- Ranke, H.
1935 *Die Altägyptischen Personennamen I*, Glückstadt, Hamburg and New York.
- Raven, M.J.
1991 *The Tomb of Iurudef: a Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London.
- Schiestl, R. and Seiler, A.
2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom*, vol.I, Vienna.
- Schneider, H.D.
1996 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tutankhamûn, II: A Catalogue of the Finds*, Leiden and London.
- Szafranski, Z.E.
1998 “Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from Tell El-Dab’a”, *Ägypten und Levante VII*, pp.95-119.
- Willems, H.
1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤健、柏木裕之、秋山淑子
2011 「Ⅱ. 第14次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60.
- 吉村作治、近藤二郎、矢澤健、柏木裕之、秋山淑子
2011 「Ⅲ. 第15次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.
- 吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤健
2010 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第12次・第13次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46.
- 吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、秋山淑子
2009 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第10次・第11次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-38.
- 吉村作治、矢澤健、近藤二郎、西本真一
2013 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第18次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.

吉村作治、矢澤健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子

2012 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告ー第16次・第17次発掘調査ー」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.21-67.

エジプト学研究 第20号

2014年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.20

Published date: 31 March 2014

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University